

佛法物語

ウテン王の正后

クエンミ國の王をウテンと名づく。クル國にマインダイと云ふ長者があつた。一人の女あり、其の女の端正華色世に比ない。されば官僚や豪姓などが八方より婚を求むる者多かりき。父の思ふに、世に君子ありて其の容貌の美しさ吾女に匹儔する者あらば娶さんと。廣き世の中に適當する男子無かりき。偶々長者が釋尊の三十二相々好圓滿にして身色金色光儀無上なるを瞻みて心竊かに喜んで云ふ。吾女の聲と爲すに相當するは正に斯人である。家に歸つて其妻に語つて曰ふ、吾今度は比ひなき聲を見出したり、速かに女を化粧し莊飾して當さにつれて往かんと。夫妻共に莊飾を嚴かにして其女を伴ひ、行歩を徐かに歩めば瓔珞の光邊を照し其姿色の美麗なること實に見る者をして心を動かさしむ。夫妻女と共に佛の御許に至らんとす、途に於て彼妻は佛の御足の跡の金紋を覽て驚いて云はく、『是凡夫に非ず、清淨なること斯の如きの聖者は姪

欲無からん、然らば必ず女を要らすとすれば還て是辱しいでないかと。夫の曰く夫は
 何故に然るか。妻の曰く『姪人は踵を曳て行く、患者は指を歛めて歩む、愚者は足地
 を踏む、斯跡は天人尊』長者の曰く『开は汝ら女人の知る所では無い、汝樂まずば自
 ら獨り家に還れよ』と自ら女を伴ひて佛の所に詣つて佛に稽首して曰く『大仁よ勤勞
 教授して自に供養するもの無し、是羸女を献ぐるに依て願くば箴治に給し上らんと。
 佛の曰く『汝は其女を以て妍美と思ふか』答て曰く『此女の顔容の美なる世間に雙び
 なし、されば諸の國王豪姓貴族争うて求むる者甚だ多し。然れども其に應せざる、竊
 かに大仁の光顔の巍々たる實に世に比なく、始めて女の配偶に能く匹を得たれば献げ
 たく思ふのみ。視玉へ、此女 頭より足に至るまで好からざる所なし』と白しければ
 佛の曰はく『惑へる哉汝は肉眼にて唯皮膚のみを見て自ら好色を思へり、吾今道眼を
 以て之を見れば頭より足に至るまで一も好きものない。能く見よ頭の髪は但毛である
 象馬の尾もまた毛である、髪の下の髑髏は屠家の猪頭の骨と異なること無し、』などと不

淨の相を悉く説き聞かしめ『斯の如き體を解剖すれば節々相離れ首足狼藉である。何れの處が好しと思ふや。昔吾れ菩提樹下に在る時第六魔王の三女が顔貌華飾天中に無比にして迎も汝の女等の倫に非ず。彼女共が我道心を破らんと欲して有らゆる誘惑の手段を取りたるも、我は其身中の穢惡を説けば、忽ち彼等は皆變じて老婆と爲り、形壞れて本に復せず、悲泣して慚愧して去りぬ。今汝此穢垢の身を以て吾に強ゆ、何の狂言ぞや、急に將いて還り去られよ』と呵責を受けて忽然として慚愧に勝えざりき『佛よ若し大仁にして取り玉はずば我はウテン王に妻せんと欲するも、可ならん哉』と佛何とも答へ玉はざりし。長者は即ち女を送つてウテン王に供提した。王は凡俗である、此女を得て大に悦び、父を拜して大傳と爲され、女の爲に新宮を興し妓樂千人を以て常に給仕せしめぬ。

王の正太后は曾て佛世尊に歸依し師事して須陀洹を得て居る。常に正法を以て世を治め大王を輔けて政を正しくす。されば宮中姝女に至る迄正法律を以て宮室の則と

す。凭の如きの正風の光後宮に照さるる時即ち明鏡妖魔の眞面目を照す、彼の妖婦の爲に如何に正後の正行が煙かりしかは察するに難からず。彼の妖婦の奸智にたけたるに大王の情にもろき、妖婦の爲に捕と爲りて如何なる事にも彼女の意を迎へて居る。されば妖婦は後宮の中の奸なる惡婆連と謀りて正后を中傷して宮中を退かしめんとした。即ち譖りて王に讒言せり。曰く正后本、佛を信する意なし、佛弟子の或若き美僧と通じて其機會を造るために信仰を装はひ、佛及び弟子等を請じ入れて相値んと欲するなりと。斯の如き奸邪の讒誣は遂に大王の激怒を招き、大王曰く正後の罪惡は天地の間に容るる所なし、之に刑罰を加へ以て之を懲さんと、大王の王祖の法あり、若し正后にして奸姪の罪を犯す時は祖先の定めたる法に依て大王自ら弓を取て射殺す。王の宣告は清淨皎潔なる雪よりも潔き正後の御許に下れり。后は之を拜するや、一度は驚怖したるも忽ちに心意を本に復して謂へらく、凭の如き、罪是宿因の然らしむる處誰をか恨まん。もはや妾が露の命は旦暮に通れり、但徒らに恨怨の念を以て斯の貴重

の時間を失ふべき時に非ず。如かじ一心に念佛して刹那々々に如來の光明に三昧現前して如來の慈眼を拜し慈悲の御胸を仰ぎて聖きに生れんと。其夜は終夜念佛三昧を以て時間の遷ることを識らざりし。翌日は庭前の樹下に縹綫の身を以て曳き出さるる時に端座瞑目して一心に佛の慈悲を念ず。時に大王は憤懣いと絶頂に達す。大弓を取て矢を番へ、己れ憎むべき逆罪人と呼びたる、狂へる獅子王の如し。后は若し眼を開きて見たならば昔は正しく妹脊の間、偕老同穴の契り深き夫の君、今は妖婦の爲に魂を奪はれて正見の眼盲ひたる痴漢、満月の如くに弓を引絞りて我を害せんとする姿。されど信仰深き后は、毫も他の念なし、但瞑目して専ら念佛三昧の專念は心々念佛し念々慈悲を想ひて、願くば如來よ、我夫王の罪を許し玉ひ必ず當來は淨土に生じて再びまた相見ゆるやうに念じけるに、今は正しく三昧現前し彌陀慈父面前に現はる。心歡喜するが故に無生忍を得る。奇なる哉大王の射る處の矢は百箭共に后を綾つて王の前に住まる。箭の盡きたる時に王は始めて覺醒し玉へり。正氣に爲つて甚だ其罪を悔

ひ悵然として懼れて曰く、我誤れり、我罪甚だ重し。卿は眞に是正しき人なり。若し
 卿實に罪あらば一矢以て命を隕すべし。百箭悉く當らず、實に卿は天意に稱ふもの
 なり。我は奸邪の讒誣を信じて惑ふて此に至ると。自ら正后の手を取て后を扶けて手
 を携えて宮に入り、深く其非を悔ひて懺悔して曰く吾過までり、自ら王位に立て一國
 の人民を掌る心の闇きことは是の如き、無辜の人を殺すこと甚だ多かりし事ならん。卿
 は實に大丈夫なり。斯る時に臨んで泰然として怖れず、自若として動せず、吾は實に
 慚愧に耐へずと謝しけるに、後は自ら謙下りて曰く、妾は本よりかよはき女性、斯る
 場合に臨んで動ぜざる如き心情は自己の力に非ず、即ち是釋尊の教に依て如來の慈悲
 を被ればなり。若し妾にして彌陀の慈悲を離れなば必ず女人の弱點なる嫉妬憤恨、大
 王の箭の下に今は死しても此怨恨を忘れじと魔鬼と爲つて中有に惑ひしこと必せり、
 實に謝すべき哉如來の慈悲、報すべき哉釋迦の恩、若し大王よ、感じ玉ふこと有らば
 今より佛世尊の御許に詣でて法要を聞き上らんととの後の勸めによりて大王は便ち金車

白象に駕して佛の許に詣り廣く御法を聴き、夫より後大王は深く佛法に歸依し、終身佛に事へて正法を以て國を治め玉へりと。

清き友よ親しく釋尊の教化を受け、正しくミオヤの光明に活ける女性の如何に力強き事よ。さればこそ彼の慈悲三昧の身には箭も得通らずして皆身を遠て王の許に還りしと。請ふ此範に倣ひて縱令罵詈謗の矢を以て射かけられても一心に彌陀の慈悲を念じて止まざる時は、毒箭の爲に自己の徳性を傷けずして還つて徳器を練るの機とならん。必ず正后の慈悲竟に夫の王をして改善せしめたる如くに、其相手を徳化するや疑はじ。實に正后は光明生活の好模範なり。

無 畏 姫

阿闍世王の王女に無畏姫と云ふあり。端正無比にして賢明無雙殊勝にも婦徳悉く

備はれり。年未だ二八にして、已に大乘の深義を解して阿耨菩提心を發せり。されば

其心の廣大なること虚空に等し。四弘誓願を以て人格を莊嚴せんとす。其理想の高尙

なる其志願の甚深なるまことに女子の大菩薩である。或日王女は御父王の堂閣の上に

在て金の寶履を著け心に大乘甚深の妙理を念じて瞑想觀念したりき。時に諸の聲聞舍

利弗等の大弟子方の來入するを見て平然として起つて迎へざるのみに非ず、默然とし

て住し共に問訊せず。牀座も譲らざりければ、阿闍世王は其無畏姫の大聲聞の聖者衆

に對する待遇の甚だ法に稱はざるを呵りて曰ふに、無畏よ汝豈に知るや、此聖者衆は

皆釋迦如來上足の弟子にして大法を成就して世の福田なるを。唯世の衆生を惑みて故

さらに福分を植させる爲に托鉢を爲され玉ふのを汝は今如何なれば起て迎へ敬禮し共

に御法を問はざるやを詰問しければ、無畏姫は父の王に曰して言さく、大王よ頗る四

天下を領し玉ふ轉輪聖王が諸の小王を起つて迎へなされ給ふや否や。王の曰く、否と

よ。復父王よ、頗る獅子獸王が小野干を見る時に起て迎へるのであるか否や。王の曰

く否。又帝釋天王が餘の天を迎へ給ふや。曰く否。姫の曰く父の王よ今妾は、如來大乘の深理を聞き菩薩の無上道心の心を發して無上の大道に向上せんとの理想と志願とを持てる精神的の轉輪王である。されば小王の聲聞や緣覺などに親近………（今宗教的に云へば大乘の志を發す人は大ミオヤをミオヤと信じて聖意を自己の意として居る者なれば其志が廣大である、世のすべては悉く同胞である、されば總て同じくミオヤの道を共に進み行てう高尚なる理想と遠大な希望を以て志願する信者である）彼の小聖者は山を移すやうな神通力もあり、千里眼も有ち、他人の心を明かに讀むの靈力は有つて居り又一切の煩惱を盡して心も清く成て居る。开は偉い。されども父王よ彼等は、大ミオヤを眞にミオヤと信せず、ミオヤの聖意を我が意として居らず眞にミオヤを愛樂せぬ故に、世の一切の衆生を眞に同胞と思はすのどこまでも同胞の苦を苦とせず同胞に樂を頒ちて共に共にミオヤの光明裡に手を携へて未來際までミオヤの道に進み行くべき同胞では有りませぬ。父の王よ何故に親しく問訊せぬと仰せら

れますけれども若し小聖者に親近しますといつか夫に同化せられて小さな心となりて
 自ら獨り解脱を得れば他を顧みる暇はない杯と云ふ様な志と成り已らば、大ミオヤ
 の道に進む事が出来ませぬ、故に問訊して法を聽かんと思ひませぬ、と白し上れば、
 大王、されども無畏よ汝は大に我慢にて無禮ではないか。彼聖者衆に敬禮せぬのは、
 と宣へば、姫は白さく、父王よ父王も亦我慢に在まさすや、如何にとなれば王舍城内
 の諸の貧窮者を迎へて禮し玉はざるにや。と、王曰く女よ彼等は我が類に非ざれば我
 何ぞ迎へて禮すべきものぞ。と、姫は王に白さく、彼の聖者衆は大ミオヤをミオヤと
 信ぜざる人にて妾等が同志類では有りませぬ。王は姫に語るらく、されど女よ汝は知
 らずや諸の菩薩等は皆總ての衆生を敬ふではないか。姫の白さく、大王よ總ての菩薩
 衆は總ての衆生をば悉く皆同胞とす、其同胞の頭の中には佛を戴いて居る故に其佛子
 の徳を崇ぶが故に禮恭するので有ます。されば妾も一切の衆生を敬禮して其人のミオ
 ヤの子たる聖徳を育てて共にミオヤの道に進み度と思ふ故に至誠に敬を生するのであ

りますと。

無畏姫は大乗菩薩の志、高尚なる理想と至大なる希望とを以てミオヤの子たる意を能く發揮したる女子にて光明主義の人の理想的志道の人である。

佛子の理想と志願は高く深くすべし、されどまた常不輕菩薩の徳行を倣ひて衆生を悉く中心より敬ふて謙遜の徳を養ふべきである。

人生は過ぎ易し、日々世務の忙はしき業に心も散り亂れ、見るに聞くに茫々として塵埃に惹かれて自己本性の奥にミオヤより受たる靈性を開くことも出来ず、ミオヤの光明に觸れることを得ずして一生過ぎ行きなば、闇より闇に迷ひ未來また冥々たる路間に入るの外なし。實に是人生の恨事である。

青年士女は何とかして幾日夜の時間を繰合してミオヤより與へられたる靈性の開發

の爲に念佛三昧を勤修してミオヤの光明を我有として光明の生活に入られまほしきものである。

有相夫人

雜寶藏經に、昔、 rol 城にウタセン王といふは聰明英邁なる大王であつた。其夫人を有相と名づけ端正にして雙なきのみならず、賢明にして婦徳具備し玉へり。されば王も甚だ愛敬し玉ひぬ。彼の國の法として王たる者は自ら琴を彈するを許さぬ、然るに夫人は曲室に在て王と共に歡戲するに自ら王の寵を恃みて王に白し上ぐるに、大王よ君琴を彈いて玉へ妾は起つて舞を爲さんと。初めて手を舉る時に王は素と相學に善

ければ、夫人の死相が現はるるを覩玉ひて其餘命のものはや七日に過ぎざるに逼れしに
王は琴を捨て慘然として嘆息を洩し玉ひければ、夫人の白し上ぐるは、大王よ妾は王
の恩寵を蒙りて敢て曲室に於て王の彈琴を願ふて自ら起て舞を爲して娛樂せんと欲す
るに何か御意に召さぬ事が有てか琴を捨て歎息し玉ふにや、妾甚だ氣に懸り候へば、
願くば妾が爲に聖意を洩し玉へと、言し上ぐれば、王は追がに答ふることに躊躇せざ
るを得ぬ。されど慇懃に請ふて己まざりければ、王は實を以て答へ玉ふ。夫人は之を
聞きて甚だ憂懼に耐えなかつた。即ち王に白して言さく妾曾て石室の比丘尼に聞けり
若し信心にして出家すること一日すれば必ず天に生ずることを得と。妾出家せんと欲
す願くば大王よ聽許し玉へ。王愛情深くして夫人に語つて曰く、六日の頭に至らば當
に汝に出家を聽るすべしと。遂に六日は過ぎにける時夫人に語り玉ふ。汝善心ありて
出家を求む。若し天に生じなば必ず來て我に見へよ、されば我聽し去らんと。是誓を
作して夫人は許可されて即ち出家を得。八齋戒を受け其の日に石密漿を飲みければ

己に命の旦暮に逼りければ餘想餘念なく心はもはや此娑婆の快樂も心に求めず、専ら心は清淨眞天に澄ましむ。一日出家の心は實に僅かなれども夫人が一日の小時間に全く人間の表に出で神を虚空無爲清淨の地に住入す。

而して平生とは殊にして無後心とて後顧の無い情神なれば其心力は甚だ強い。夫人は腹中絞結して遂に命終しけり。而して夫人は出家の善縁に乗じて天上に生ずることを得て本誓を憶ふが故に王の所に來りぬ。光明熾然として王宮を照しぬ。時に王問ふて言はく、波是誰ぞ。天答て言く、我は是王の婦にて有相夫人なり。王喜びて曰く、さらば願くば座に就けよ。天答て言はく、我今王を顧るに臭穢にして近づくこと出來ぬ、但先の誓に報ゆる爲に來て王に見ゆるのみ。王は聞し召されて、心開け意解けて自ら嘆じて言はく、今彼天は本我婦でありし。出家すること一日使ち天に生ずることを得。其神志の高遠にして還て自ら鄙賤せらる。我自慚つ、何ぞ出家して神氣高遠に清淨無爲の靈性を開發せざらん哉と。我曾て聞く天の一爪甲さへ一閻浮の地に値すと

我此一國何ぞ食ばるに足らんと。位を捨て子に譲り出家得度して道を得たりと。

道に入りし後と未だ道に入らざる時との精神状態は甚だ懸隔す、一たび念佛三昧の道に入りて光明獲得する時は未だ光明得ざる時に比すれば、闇夜と日中との懸隔あり。或會員の婦人の曰く妾未だ入信せざる前には良人は教育も自分よりは勝れ高尚な理論も有て居り随分偉い人と謂ひて居りしに、自ら信仰の光明を得たる今日にして夫の理想と希望とを觀察する時は、男として何故進んで更に高尚なる理想と遠大なる希望とを有たうとせぬならん。瑣々たる名譽や何かに捉はれて居るを見る時ははがゆく思ふ。妾如きの婦女子が斯く思想上高遠なる光明を信仰するやうに爲りしは全くミオヤの恩寵と深く感謝せざるを得ぬと。

光明と闇黒

信仰の光なき人は自ら闇きが故に自己を覺せず、少しの罪でも地獄に落つ。光明を得る人は罪も地獄に落ちず自ら罪を悔て改むるが故に。那先比丘問佛經に曰く、彌蘭王が那先比丘に問て曰く、人世間に在て惡を作りて百歲に至り命終の時に臨んで念佛し死後に天に生ずと、我此語を信せず、復一の生物を殺して死して地獄に入る、我亦是を信せずと。那先比丘王に問ふ。王よ若し人が小石を持て水上に置在するに石浮ぶや否や、また没するや。王の曰く、其石は必ず没す。那先曰く、然らば若し百枚大石を持て船上に置く時は其石没するや。王の曰く、否なり没せず。那先曰く、船中百枚大石は船に由る故に没せず、人も大惡ありと雖も一時念佛するに依て地獄に落ちずして天上に生ず、何ぞ信せずらん。其小石の没すと云ふは人の惡を作して佛經を知らず死して後使ち地獄に入るが如し、何ぞ信せずらんや。王の言はく善哉善哉。那先比丘の曰く、兩人俱に死するに一人は第七の梵天に生じ一人は罽賓國に生ず、此二人遠近異なるけれども死する時は一時に俱に到るが如く、又一雙の飛鳥が一つは高樹の上に止

まり一は卑樹の上に止り兩鳥共に一時に俱に飛ぶに其影は俱に地に到る如し。那先比丘の曰く愚人は惡を作すに殃を得ること大く、智人惡を作す、殃を得ること少ない、譬へば燒鐵が地に在ると一人は燒鐵たることを知り一人は知らず、兩人共に取るに、知らざる者は手が爛れ知る者は少きが如くである。智者は惡を作して甚だ非なるを自覺し悔ひて改む。故に其殃が少ないと。

法の爲に命を惜まぬ女

阿育王經に、昔、阿育王、道人を請じて說法せしむる時に歩障を以て婦女の席を遮りて聽法せしめたり。時に法師は諸の婦女の爲に說法するに、布施の功德また戒の功德は天に生るるとの説を聞かしめた。時に一の婦女あり自ら決心して王の定め玉ひし法を犯して幕を開きて法師の前に進み出て、法師に問て云はく、師よ如來が菩提樹下に於て正覺を成じ玉ふ、時に布施や戒法を覺り玉ひしや將た更に餘の法を悟り玉ふ

や。法師の答には、如來は一切有漏の法は皆苦なり猶し融したる鐵の如し、苦の因は煩惱により生ず、开は毒樹なので、八正道を修むれば苦と煩惱とが滅すと覺り玉ふ。是女人は此法を聞て須陀洹道を得られた。すると刀を頸に繋けて王の所に詣でて、王に白し上げらるるには、大王よ、我今日は王の重き法を犯したれば願くば王よ規則を以て妾を治し玉へ。王問ふて曰く、汝如何なる事を犯せしぞ。答へて、妾王の禁制を破りて道人の所に至るに、譬へば渴ける牛の死を避けざる如く、我實に佛の法に渴きての故に默突して法を聴きたり。王問ひて曰く、汝法を聴きて何か得る所有ありしや。答へて、頗る得る所あり、法を得て四眞諦を得たり。世のすべての身も心も眼も耳も外界の色聲等も悉く皆無我なることを知りて遂に法眼を開くことを得たりと。王は是の語を聞きて、踴躍歡喜して即ち爲に禮を作して更に令を發して曰く、自今已後婦女の爲に障隔を作することなく法を聴かんと樂ふ者は直ちに法師の所に至つて對面して法を聴くべしと。尙王は歎じて曰く奇哉、我が宮内より眞の人の寶を出せり。實

に聽法は大利益なりと。

如是の婦女は實に賢明である。宮中に宮仕への婦女等が唯粉黛を事とし衣裳を自ら誇とする如きの輩と斯の賢婦の如く心靈の寶石よりも輝かし已に法眼を開きて一切の法を如實に見るの明眼を得たりしは、王が眞人の寶として稱すること實に所以あり。眞理を覺りて永遠不朽の心靈に活きんが爲に此假の形體を輕んず、肉に死するとも靈に活きんと欲するの道心最も稱すべき也。

感應錄

晋沙門竺法師は會稽に住せり。北中の王、恒之と友であつて共に死生罪福の報應の事を論じて居つた。然れども凡情未だ明め難し。未來の有無が審かに分らぬ。因て共に約して若し先に死せば當に相報すべしと。別れて後、王恒は都に住す。廟の中に於

て忽ちに法師の來るを見る。王は驚きて曰く、和尚は何處より來玉ふぞ、答て曰く、貧道某の月日に命終れり。一生の罪福因果皆虚しからず影と響の如し。されば君よ但當に勤めて道を修して神明昇濟し玉へ。先に君と約束せしが故に來りて相告ぐるのみと、言ひ終つて復見えすと。

一寸先の闇

經に、人は自ら智慧ありと謂へど實は無智なり。生の從來する所、死の趣向する處を知らずと。世の人自ら無智なるを悟らず、故に永遠の光明を覓めず、惑むべし。法句譬經に、佛無願國に在りし時に國城中に一の婆羅門が有り、已に八十に向んとして財寶は無數で、人と爲り度し難き族である。道德を識らず無常を計らず、唯目前の利己と欲樂に耽りて、毫も己を省ることがない。更に好舍を造り前房後堂、涼臺溫室東西の兩廂、數十の梁あり、唯後堂の前距陽が未だ出來上らざる時に、婆羅門自ら經

營いして衆もろくの職工しよくうを指揮しきす。佛ほとけは道眼だうがんを以もつて此老翁このらうおうを見給みたまふに、命いのち今日こんにちに逼せまりを自みづから知しらず、方まさに怡々いゝとして繕治ふしんを事こととして居ゐる。彼かれは物質ぶつしつ的に富ふめるも精神せいしんは甚はなはだ貧窮ひんきう實じつに愁なはれむべき徒やからである。佛ほとけの大慈何だいひいにして是これを救すくはで置おくべきぞ。便すなはち阿難あなんを將ひきひて其門そのもんに至いたりて先まづ老翁らうおうを慰問ゐもんし、いかに勞倦らうけんなき哉や、今此舍いまこのいえを作る何なにを安やすくべき爲ためぞ。翁おうの言いはく、前房ぜんぼうには客きやくを待たいし、後堂こうだうには自みづから處をり、東西二廂とうざいには兒息こどもや又財物またざいぶつや僕使めしつかひを安やすく爲ためにして、夏なつは涼臺りやうだいに上のぼり、冬ふゆは溫室おんしつに入いりて日ひを送おくるなりと。佛ほとけは老翁らうおうに語かたり玉たまふに、老翁らうおうよ、久ひさしく宿德しゆくとくを聞きいて居をりしが談はなしをすることが未いまだ出來できざりし。今佛いまほとけに要偈えうぎあるが故ゆゑに之これを讀よまれよ。汝なんぢが爲ために利益りやくありて贈おくらうと思おもふが如何いかにぞと。少時しほしくま車を止とめて聽きくことが出來できるかと問とひ玉たまへば、老翁らうおう答こたへへて、今は大に違ちがはしくて坐すして語かたることも出來できぬ。後日更こうじつに御出おいでに爲なつて聞きかして玉たまへと。其要偈そのえうぎとは斯樣かやである。

「子こあり財ざいあり、愚ぐにして唯汲々たいきうく。我且われかつ我われに非あらず、何なんぞ、子こと財ざいと有あらん。暑しょには

此に止るべし、寒には此に止るべし、愚にして多く豫め慮る、來變を知るなし。愚
 瞽愚蔽に自ら我智ありと謂ふ。愚にして智と稱す、是を極愚と謂ふ。」

婆羅門は曰く、此偈のことは更に聞かんとす。今は實に遠いから後に更に來り玉へ
 と。世尊は其愚を憐れみ、傷みてそこを去り玉ふ。後で老翁は自ら屋椽を工に授けや
 うとして其椽が墮ちて頭を打ちて即時に死して了つた。家族輩は啼哭して四隣に驚し
 た。世尊が去りて未だ遠からざる間に便はち此變あり。實に一寸先は闇である。

佛は其御歸途にて諸の梵士數十人に御逢ひなされば、彼等は、佛陀は何れの處より
 來り玉ふぞと問ひければ、世尊の曰はく、今日は死せし老翁の舍に到りて翁を説て救
 はんとしたが、彼の愚昧なる、教を受けず無常を知らず、今は忽然として已に後世に
 屬しぬ。具さに梵士等の爲に前の偈義を聞かしめしかば、梵士等は聞いて欣然として
 道跡を得たり。世尊爲に偈を説いて曰はく。

愚昧にして智に近づくは瓢の味を斟むが如し久しく狎習すと雖も猶法を知らず、濶

達にして智に近づくは舌の味を嘗むるが如し、須臾に習ふと雖も即ち道要を解す。愚人行を造りて身の爲に禍を招く。快心にして惡を作り自ら重殃を致す。行を爲す不善、退て悔悵を見る。涕の面に流るゝを致す、報は宿習に由る。

梵士等は重ねて此偈を聞いて益篤信を懷き佛を禮して去りぬ。

深信の女子

雜寶藏經に云ふ。若し人道を求めて要精誠に在らば相感じて能く道果を得らる。往昔一人の女子があつた。聰明智慧あり、學術技藝を修めたる女子なりき。曾て聞く人は如何に學業技藝に達すとも若しも宗教心の確立せざる者は心靈の光なき者、狡猾なる動物に過ぎずと。女子頻りに道法を求む。佛教の法、若し法を聽かんと欲せば僧を請じ齋を供養して而して後に法を聽く。

一の老僧が乞鉢して次いで其舍に到る。求道の志の深き女子此の僧を請じ入れて

懇ろに供養し已つて曰く、大徳よ、妾は靈に渴けり、願くば妾が爲に法要を説いて妾が愚昧を開きて眞正の理を悟らしめ玉へと。此僧年は老ひたるも至つて鈍根にして素より知曉なく至誠心に懇請するも素一偈一句の知るなく、説くに由なし。然るに女子は謂へらく實に至理は甚深、容易に曉り難し。教法は心の道なり。若し道法を聞て誤解せば大に利を失ふ。依つて一句も聽損じなく一言も誤解せざらんが爲に瞑目靜黙して處誠にして聽かんと欲す。老比丘は自ら愚昧にして説くべきを知らず。良久しくして未だ黙したるに、女子は瞑目默然たるが故に老比丘謂らく、ア、此女子已に眠れり之を機として遁れ走らんと。窃かに起つて寺に還る。僧は已に歸れるも女子の至誠懇請の相感する處斯の如くに感せり。ア、女子よ有爲の法は無常にして苦と空にして實には自在を得るものでない。されば此有爲を離れなば、永遠眞實自在の法は自ら得るべしと。心靈自覺の光明は深き自己の奥底より喚發せり。女子は無明の闇より始めて心靈の曙光を感じ歡喜言ふ可からず。眼を開きて老僧を覓むれば已に其姿を見す。

老僧を尋ねて此難謝の恩に報ゐんと欲し其母に告げて女子は一人の婢女を伴ひ其寺に詣つて相見えんことを願ふ。老僧は尋ね来る女子に接するを慚ぢ、己が無智にして其請に應ぜざるを恥ぢ、復た女子を棄て藏れ避けんとす。女子は苦ろに求めて止まざれば恥し乍ら老僧は其女子に向つて前の逃去りしことを謝す。女子は還つて上の恩を述べ教を蒙りて眞に道果を得たり。自己が現來を通じて永遠の光明を得たるは全く大徳の御恩なりと。願くば其大恩に報せんが爲に更に更に供養を齎して來れりと禮しければ、老僧は女子の先の上の事を具さに語りければ其れを聞き深く自ら尅責して還つて道果を得て即ち永遠の光明を發見せりと。

されば行者至誠深信なる時は斯の如く感應を得。故に求道者は至誠と深信とを要す。

智慧ある盜賊

生經に、往昔、姉弟二人あり。姉に一子あり。舅と俱に宮中の御厨に織物を納むる

業をなせり。帑藏の中の奇寶好物を見て共に議つて曰く、吾等織るに勤苦す、少し共に取て貧を助けんとて、地に穴を穿ちて官物を盗み取ること屢々であつた。監藏者が織物の減少するを見て王に白し上げた。すると王は、さらば廣く外に聞かしむる勿れ、必ず亦盗みに來らん、舅と甥との盗人は王が未だ覺らぬと謂つて居れば、亦重ねて來らんに依つて能く嚴警して捕獲せよとの王の命を受けて藏監が警備して居つた。すると又重ねて來て盗む。利智なる甥が舅に教へて曰く、舅は年高け體疲る。若し守門に捕はれる恐あれば、我は力強し舅を濟ひ出すべし。舅は適々窟に入つてつゝに守門者に捕へられたり。甥は捕へられず。明かに發覺するを恐れて舅が頭を截て自分は窟より出た。翌朝之を見て藏監が具さに王に啓上げた。すると王は詔して、其屍を出して四交路に置きて若し哭て死屍を取るものあれば則是賊の魁なり之を捉へよと。屍を四衢に棄て、警守して日を累ぬ。人馬が填塞して路を塞ぐ。すると賊は闇を射て兩車の薪をのせて屍の上に置く。守者王に啓す。王守者に警告して、若し薪に火をつけ

て焼く者あらば縛して捕へ來れよと。すると甥は童子に教へて炬を執つて舞ひ戯れしめ、いつの間にか火が薪についた。守者も火を誰がつけたか覺らぬ。具に王に啓し上げた。王詔して、若し闇維した者があらば之を收へよと。すると又人を以て猥りに酒を醸して守者に與へた。之を飲み過ぎて守者は遂に酔ふて寢て已つた。すると甥は酒瓶に骨を盛つて去りぬ。守者が覺めて明けて復た王に啓し上げた。王又詔して前後警守しても收捕できぬ狡猾なる盜である。更に謀を設くべしとて、王は美女を化粧し房室を大川の傍に立て衆人を侍衛せしめて此女を以て賊を釣らんと計つた。すると或夜甥は竊に來て水の中に大株を流して唱叫して犇り隠る。守者驚いて異人ありと謂ふて但株坑を見て連著すれども變せず、守者催眠にかゝつて眠つてしまつた。甥は株に乗て女の房室に到り、女は衣を執へると、甥は女に向つて云ふには、女よ衣を牽くならば我臂を捉ふべし。甥は猾智あり豫じめ死人の臂を持って女に授けた。女は衣を放ちて臂を捉へて大に叫びて守者を呼んだ。守者は寢て甥は已に脱走してしまつた。

明けて又具さに王に白し上げた。王詔して曰く、此人方便無方である。久しく捕ふること能はず。何にしてか之を捕へん。女は已に懷妊して男子を産んだ。しかも大きな端正な子である。すると乳母をして處々を徧行せしめて若し子を見て泣く者あらば捕縛して送り來れと。兒を抱いて何日立ても就いて泣く者が無い。甥は餅師となつて餅爐の下に居ると小兒が饑て啼く。乳母は兒を抱いて餅爐の下に行く。餅を市つて兒に舗はした。甥は兒を見て鳴く。具さに王に白す。王又詔す、何故に縛送せざる哉と。乳母答へて小兒饑て啼く。餅師が餅を授けたので因つて鳴いたのでは賊では無いことならんと。次に乳母をして兒を抱て出でよ、兒に近く者あらば縛して來れと。今度甥は美酒を沽り母の伺者と呼んで酒を勸めて醉眠せしめて竊に兒を盗んで去つてしまつた。乳母は醒めて兒が失つたのを發見し、具さに王に啓し上げた。王は詔して卿等は實に頑愚である狂水を食りて既に賊を捕へず兒まで失ふとは。甥は其兒を抱て他國に至り其國にゆくや先づ國王に見えて種々の政事に宗教に經を引き義を談じ王をして感

動せしむ。王大に歡び祿位を賜うて以て大臣に輔せられた。吾が國中に智慧方便卿に及ぶ者なし。臣が兒を以て吾兒の如くせんと。配偶を覓め王位を譲らんと曰ふ。若し大王よ臣を哀れまば本國の王女を覓んと欲す。王の曰く善哉汝が望に任せんと。王即ち太子に立て使を遣はして彼の王女を求む。彼王は之を可す。そこで使者を遣はして王女を迎へんと欲し其太子に勅して五百騎馬皆嚴整す。甥は實は賊臣なれば恐懼を懷き若し彼國に到らば必ず我を發覺し執へられんこと必せり、便ち王に啓し、若し王よ王遣はさればその人馬衣服鞍勒悉く差異なくして姫を迎へ玉へ。王其言を然りとす。王は二百五十騎をして前に置き、二百五十騎を後に在く、甥其中に在りて馬に跨つて下りず、女の父王自ら出で、屢之を觀察す。王騎中に於て自ら甥を監して出づ。爾の爲す事是非か前後方便して捉へんとして得ざりしと。稽首して答て曰く、實に爾り是なり。王の曰く卿が聰黠天下に無雙なり、卿が願ふ所の女を以て之を配して夫婦と爲すべしと。佛の曰く爾時の甥とは則吾身是なり、外國の王とは舍利弗にして其舅

とは今の調達てうだつにして女婦翁ぜふおうは淨飯王じようはんおうにして婦母ふはとは摩耶夫人まやふじん、其婦そのふは拘夷くゐい是これなり、其子そのこは羅云らくん是これなりと。

菩提心の勝れること

菩提心ぼだいしんを發おこすことは實じつに貴たふとい、發心はつしんの大だいなるは其結果そのけつぐなまた大だいである。獅子しの兒こは生うまれた許はかりでも大おほきな犬いぬよりは其性そのせいが勝すぐれてゐる。菩薩はつさつの心こころを發おこしたる上うへは未いまだ成就じやうじゆせぬでも小乗せうじやうの羅漢らかんの神通自在じんづうじざいなる聖者せいしやよりも其志そのこころざしに於おて勝すぐれて居ゐる。迦陵頻伽鳥かりようびんげてうは卵中らんちゆうに在あつてもまだ聲こゑを發はつすること出來できぬけれども餘よの鳥とりよりは勝すぐれてゐる。一人ひとりの六通つうの羅漢らかんが一いっの沙彌しゃみを將つれて衣鉢えはちを負おはしてゆくに沙彌しゃみの念おもひに、我われは大乗だいじやうの佛乘ぶつぜうの道みちを以もつて得道とくだうせんと志こころざした。すると先さきに立たちたる師しが其沙彌そのしゃみの心念しんねんを知しつて（菩薩はつさつの心こころ）オ、小僧こそう其衣鉢そのえはちは我われに與あたへよ、とて自分じぶんで擔推かつずしてゆく。而しかして沙彌しゃみを前まへに立たて自分じぶんは御供おともの如ごとくに後あとについてゆく。すると復沙彌ふたしゃみが覆かへりて復思ふたおもふに菩提心ぼだいしんを起おこし

て成佛するは實に容易でない。甚だ難い。久しく生死に住して無窮に衆生を度して而して後に自ら成佛するは中々の事である。矢張り小乗の聲聞行を以て早く涅槃の樂を得た方が然るべくあると思ふと、師は復其心を知つて、オイ小僧此衣鉢は汝が荷へよ、と還た沙彌に擔はしめて、汝は我が後について來れ、と是の如くに三度に至つた。沙彌は師に白す、師は年老耄して狀ち小兒の如くである。師答て曰く、汝が初めに心に菩提心を發して佛に成らんと思ふた、其心が如何にも貴く位重し、是我が師諸の辟支佛ですら尙其方には供養すべきである。如何に況や羅漢をや。故に我は汝を前に立て我は後に隨うた。する内に又汝が菩薩の行は甚だ難い矢張り羅漢の方がよいと念うた。故に我は已に羅漢であるから汝は未だ初發心である故に汝を後に就かしめたのであると。沙彌は之を聞いて驚悟して大乘心に決定したりしと。

身を棄て一偈を聞く

我過去無量劫に釋迦牟尼と云ふ佛出世して常に大衆の爲に涅槃の眞理を説き玉ふ。

爾時に我善友に従うて聞く。善友が曰く、我汝が爲に自ら聞く處の法を聞かせんと、

我は悦びに堪へず、願くば我に聞かしめよ、願ひの餘り何か心盡しの供養を爲さんと

すれども貧乏にして物が無い。暫く思惟へて、よし我此身を賣つて願くば微しも獲あ

らば之を以て供養せんと。乃ち路間に或人の曰く、我は人を買はんと欲すれども誰も

家業の爲に身を賣る者がない誰か身を賣つて呉れるものは無からうか、其故は實は我

に惡病ありて良醫の曰ふには、此の病には日々に三兩の人肉を服する時は癒えんと、

卿若し身肉三兩を與へば金錢五枚を給らんと。我之を聞いて大に歡び乃ち語つて曰く

汝我に錢を與へて七日間の猶豫を與へよ、我事を辨じ已らば還つて此肉を與へんと、

其人の答には、七日は待ちきれぬ、若し然らば汝に一日丈の暇を聽さんと我は爾時に

其錢を取り得て佛の御所に至り頭面に禮を爲して盡く佛に上りて然して後誠心に其

經を聽受す。我時に闍鈍にして經を聞き上るも唯能く一偈を受持するのみ。便ち彼病

人の家に至りて我は日々に肉を興へたり、然れども一心に偈を念じて其内に身心の念を投入して念するが故に毫も病を感せずして一ヶ月を満ちたり。是因縁に依つて其病が善くなると共に我身も平復して亦瘡痍だにもなく身を見るに完全にして即ち無上菩提の心を發したりき。一偈の力尙是の如し、何ぞ況や具足して讀誦せんをや。我此偈に依て此利を得、發心して今成佛して釋迦文と字くと。

常啼大士法の爲に心血肉を

常啼は常に啼いて法を求むるが故に名づく。佛の所に往いて菩薩の道を行する般若を求むる時に身命を惜ます名利を求めず、空中に聲ありて之を誡む。我當に何の處にか般若の眞理を聞かん、求めて未だ得ざる間は常に憂愁啼哭して七日を過ぐ。身體疲れ極まる。飢渴を忍び寒熱を凌ぎて渴望す。時に空中に佛在まし、告て曰はく、善男子よ過去の諸佛も菩薩の道を行するに般若を求むること汝が今日の如くなりき。勤め

て精進し法を愛樂するが故に般若波羅密を供養す。時に曇無竭菩薩あり。此座上に於て般若波羅密を説き玉ふ。若し之を讀誦し如説に修行する者あらば晝夜を問はずとめよ。久しからずして聞く事を得ん。我今貧にして供養するに般若を説く法師に供養したくも物なし。おもふに我生々世々に身を喪ふこと無數、空しく身を捨てたりき。未だ曾つて清淨の法の爲にまた法師に供養の爲に身を捨てざりし。今は此身を賣て供養せんと。乃ち一の大城に入り市肆の上に在りて高聲に唱へて曰く、若し誰か人の身を須うる者あらば此身を賣らんと。時に惡魔が思ふに、此常啼が法を愛樂するから身を賣らんと欲す、我今此を買ひ取て傷ふて遣はさんとて諸の人民には其聲を聞こえざらしむ。故に買求むる者なし。甚だ憂愁に耐へず。時に帝釋天化して波羅門と爲りて語りて曰く、我今天を祠るに人の心血髓を須めんと欲すれば汝能く與ふるや。答へて我は悦んで賣らんと。乃ち自ら刀を執て其の左臂を刺して血を出す。右の髀の肉を割き骨を破り髓を出さんと欲す。時に一の長者の女あり門の樓上に在りて遙かに見て乃

ち下りて菩薩問ふ。君何が故にて斯く苦困し、自らの心血髓を用つて何等をか爲すぞ。答へて曰く、我は此を售つて波羅門に與へ其金を以て般若の法に供養せんとす。女問ふ、其何の功德が有る。答へて、善く般若方便力を學んで我は法を學んで無上道を得、無上道の爲に衆生のたすけを爲して金色の身と爲りて諸の功德が備はれり。此功德を一切衆生に分布せんとす。女は聞いて感じて曰く、希有なり微妙にして値ひ難し。斯る功德の爲に身を捨つる恒河の如くなるも捨つべし。君若し財の須むるあらば相與へん。妾は深く君が求道心の深きに感ぜり。君の如きは將來定めて世に無比の聖者と爲らん。妾もまた曇無竭菩薩の所に往きて共に諸の善根を植んと欲すと。帝釋は本身に復して讃じて言く、善哉善男子よ、諸の過去の佛も菩薩の道を行じ玉ふこと亦かやうでありし。我實に人の心血髓を用ゆるに非ず、但汝を試みんが爲に來りしのみ。何ぞ須むる處を與へん。願くば我は身平復して故の如くならん。長者の女の家に到れば其女の父母は甚だ悦び其志を感じて衆の妙華香及び諸の瓔珞塗香燒香播蓋衣

服等を與へ、侍人と共に往いて曇無竭菩薩に供養し曇無竭は般若波羅密と及び方便力を説きたまへば常啼は水を求めて地に灑がんと欲するも水が得ざれば自ら身を刺して血を以て地に灑ぎ塵埃を無くして來つて大師に供すと。

五百釋女の出家

いと道心深き釋氏の女あり。數多の女たちに勸めて曰く、妾曾て佛の説を聞き上る若し人劇急の中に於て一心に念佛して至心徹通する時は精神に安穩を得ると、數多の女は教に隨ひ異口同音に至心を念佛して南無釋迦牟尼と唱ふ。苦哉苦哉ア、痛しい哉。時に空中に如來慈悲力を以て大悲の雲と大悲の雨を雨ふらし諸女の手足本の如くに復す。女等念言すらく、我如何にして佛の慈恩を報いんと。乃ち衣鉢を持ちて王園精舍に詣つて出家を求む。時に六群比丘尼共が其釋女の年若く美色端正なるを見て云ふには、諸の女子衆よ、君たち當さに花の開かんとする齡、五欲の快樂を捨て道に入

るは未だ疾し。種々の情的の欲樂を説て其志を止めんとす。假令出家せんにも年老いて後にして可ならんと。よりは俗に還りなされ、而して其衣鉢は我に與へよ。諸女之を聞いて心に苦惱を抱きて曰く、肴膳の飲食に毒藥を和する如き世間五欲の過患の甚しき、我等は實に厭へり、云何ぞ其れ之美を讚歎して我等が志を抑止し玉ふやと。聲を擧げて哭泣す、華色比丘尼は問うて、女の君たちよ、何故に斯く歎き玉ふぞ。答へて、妾等は出家せんと欲すれども聽されぬ故にと。華色尼は大に同情を寄せて則ち度して弟子と爲した。釋女等が悲喜交々懷きて具さに一族の喪失身殘るの悲をのぶ。華色尼曰く、汝等が辛苦何ぞ言ふに足らん。暫らく妾が因縁を聞かれよ。我昔在家の時に、此舍衛國の父母は我を北方の人の所に嫁せしめた。彼國の風俗として婦女の産に臨む時父母の家に還つて兒を産むのである。乃ち夫妻馬車に乗りて中路に河あり、其水が漲りて道路曠絶して賊難の恐あり。河に到りしに渡ること出来ぬ。岸邊に住宿せしに初夜に小兒が産れた。すると大毒蛇が新血の臭氣を聞きて便ち來りて我に

向ふに先たち奴僕を殺せり。夫を喚べども應へぬ。尋いて復夫を殺し、次に牛馬を殺し、日出時に夫の身が降爛の痛苦酷しく大に哭く。數日を経て獨り川岸にあり、其水漸く減じぬ。大兒を置いて身に小兒を負うて手にて裾を牽き新産兒を口に銜んで水を渡る。後を反視れば大兒は虎の爲に逐はれるを見、叫喚して裾を落した爲に嬰兒は没溺し手にて探れども兒は竟に得ぬ。背の兒は手を失して水に落し、其岸上の兒は遂に虎の爲に喰はれ心肝分裂し、口に熱血を吐き岸に至て悶絶す。火あり伴つて至る中に一の長者あり是父母の知人である。我生家の消息を問へば長者答へて言く、昨夜汝の家より火を失し家は燒盡し父母俱に亡ぶと。之を聞いて悶絶し良久しうして甦るに數多の賊が衆の伴を蕩盡して我を將れて去る。賊の婦と作りて常に門を守らせらる。若し緩急あれば人の爲に逐はれ須く盡く門を開きて後に群賊共に抄す。財主が王及び聚落に告ぐ。そこで其家に還へり舍内にて子を産む。三び喚ども人無し。開ひて櫓より入て問答す。賊の曰く、汝子の爲に危害す其子を刀を抜いで手足を研つてやる故に

之を食へよと。婦恐怖して食ふ。そこで夫は瞋恚息む。夫は續いて王の物を却めて執はれて賦は婦と共に生埋らる。すると人が我身に妙璣珞あるを知り塚を破りて之を取り我を將れて去る。少時を経るとまた王司に發覺せられまた捉はれ賊と共に合して埋らる。埋むるに固からざれば其夜虎が食んとして復出づることを得。迷走して東西を知らず、懸命に馳走る。數多の人あるを見て問うて云く、人たちよ、何れの處にか能く我が如き罪深きものの此憂患を除くことを得んやと。時に長者波羅門等あり。深く慙れみて曰く、釋迦牟尼佛の法を得ると心が生れかはりて諸の煩悶苦惱が無くなりて眞の安穩を得ると。我は聞いて悦びに堪へずして従ふて次第に修習して今は道果の光を得て光明の生活に入ることを得たのであると。釋女は之を聞いて心大に悦びて法眼淨を得たり。時に大愛道比丘尼曰く、如來の法海は一切衆生に悉く分あれども我等女人は如來聽し玉はず。女人は諸の疑惑と執着と多く痴愛に覆はれ自ら出ることに出来ぬ。虛榮心我慢心多くして菩提心を莊嚴して三乗の道果を得ることは出来ぬ。時に阿

難尊なんそん者が強しひて請こふて佛ほとけの聽ゆるしを得えんとすれども許ゆるし玉たまはざりき。佛阿難ほとけあなんに言たまはく、大愛道だいあいだうが佛法ぶつぽふを愛樂あいぎやうし大精神だいせいしんを發おこし清淨しやうじやうにして八敬きはうの法はふを修習しゆしゆせば佛法ぶつぽふに入ることを聽ゆるすべしと。我出家われしゆつけを得えて大悲薰習たいひくんしゆすること普あまねし、一切さいの女人にょにんの爲ためである。

人格の價値を自覺せよ

汝なんぢ 自ら反照はんせうせよ汝何なんぢなんの爲ために活いける哉や。

釋尊しやくそんの徒羅とら云未うんだ道みちを得えざりし時ときに貢慢こうまん擴言くわうげんにて誠信せいしんの心こころが少すくない。本王家もとわうけに養やしなはれ放縱はうじゆに育そだちし故ゆゑになり。世尊せそ此性質このせいしつを矯正けうせいせんが爲ために羅云らうんに勅ちよくして、汝賢提精舍なんぢけんだいしやうしやに住すまして口くちを守り意いを攝さつめ經戒きやうかいを勤修こんしゆせよと。羅云らうん教をしへを奉ほうじて作禮さくらいして去さつて住すまること九十日にち、既往きわうを慚愧ざんきし自ら悔みづかひて心神しんしんを精練せいれんして息やます。佛往ほとけけういて之これを視玉みたまへば羅云らうん歡喜くわんぎして佛足ぶつそくを禮らいし繩床ぜうせうを安施あんせし震越しんごつを攝受せつしゆし上たてまつれば佛ほとけ、繩床ぜうせうに在あつて告つげ玉たまはく、汝なんぢ澡盤さうはんに水みづを取とつて汝わが足あしを洗あらへ、足これを洗あらひ已おほつて佛羅云ほとけらうんに語かたつて曰のたまはく、此水このみづは飲料おんれつと

爲るべきや否や。羅云白さく、此水本清淨なり、今は已に足を洗ひ塵垢を受く、もはや飲料とは爲り申さぬ。佛告げ玉はく、汝も亦此水の如し、本我子にして王の孫なれども世の榮祿を捨て沙門と爲ることを得て、精進を念せず、心を攝し口を守らず、三毒の垢穢が胸懷に充滿せば亦此水の如くにまた用可からず。佛復羅云に告げ玉はく云、何ぞ澡盤は空なれば食物を盛るべきや否や。白して曰さく否なり、なせなれば已に澡盤の名あり、曾て不淨を受たる物なり。羅云よ、汝もまた然である、沙門と爲ると雖も口に誠信なく心性剛強にして道に精進せず、曾て惡名を受くる亦澡盤の食を盛るに中らざる如くなり。佛御足を以て澡盤を撥却せしに輪轉し自跳自墮し數反して止まる。佛羅云に告げ玉はく、汝寧ろ此を惜むや、澡盤恐らくは破るるや否や。羅云白さく、足を洗ふの器は賤價の物である、意中に惜と雖も大に慇懃ならず。佛の曰く汝も亦斯様である、沙門と爲ると雖も身口を攝めず、麤言惡口にして已に傷物である。何人も愛せざるもの、智者も惜まず、身死せば神は三途に輪轉自ら生死に受る苦

惱無量である。諸の聖者の愛せざる所汝が今澡盤を惜ますと言ふが如し、羅云聞いて慚愧怖愧す、佛羅云に告げ曰はく、我が喩を告げ、昔國王に一の大象あり、猛健にして能く戦ふ。其王軍を興し逆國を伐たんと欲し象を以て嚴行せしむ。象は唯鼻を藏し護て鬪に用ひず、象士歡喜、象の鼻を護るを知りぬ、其所以は象の鼻は軟脆なれば箭に中れば即ち死す。羅云よ唯口を護ること此大象の鼻を護るが如くすべし。羅云は佛の慇懃なる慈訓を聞き感激し自ら勵んで一道果を得たりと。

シトク王の妃

世には其家は門閥家にありて形骸は華奢を極めて其志想の卑賤なるあり。假令其身は卑賤なるも其志氣潔く理想の甚だ高尚なるあり。ミオヤの聖意を意と爲る人は高尚なる理想と志氣の清廉ならぬはなし。

舍衛國の大姓婆羅門にヤニヤダバと云ふあり。財寶饒富なり。其家に黃頭といふ婢

女あり。常に末羅園を看守してをる。此婢女身は卑賤なれども其志想甚高尚にして其の品性高潔、才智勝れたり。自ら謂へらく、我いかに志氣高くも身婢賤にしては自己の志望を満たすこと能はず、願はくば婢を免れて王家に立たんと欲す。此婢が晨朝の食の乾飯を分け持つて園に往く途中に於て世尊の乞鉢したまふを顧みて黃頭女遙かに世尊を見上り、心に念すらく、我今此食を持つて世尊に施し上らん。願くば婢使より脱して妾が志望を遂げさせたまへと。世尊は慈愍して精舎に還へり王ふ。婢女は心に一に世尊を念じて忘るる能はず、前みて園中に入る。時に波斯匿王、四兵を嚴にして外遊獵に出でたまふ。人の分張に隨つて群鹿を馳逐す。天時に大に熱す、遙かに末羅園を見て車を廻らして徒歩して園中に入りたまふ。黃頭女遙かに王の爲したまふ舉動を見て、是平常の人に非ず、定めて王者ならんと。即ち前んで奉迎して曰さく、善哉大人よ、此座に就き玉へ、即ち一衣を脱ぎ敷いて王を座せしむ。黃頭跪き問うて白さく、いぶかし水を須めて洗脚し玉はんや否や。王の曰く、爾り、即ち水を取

て王に上る。王の爲に脚を洗ひ上る。復た王に問て曰く、洗面しまほしくいまさす
 や。水を以て王に上つて洗面せしむ。復た王に問うて云く、御飯を欲したまふや、池
 にて手を洗ひ、存き薪葉を取て水を盛り、王に上る。復た王に問ふ、不審し、臥息し
 ま欲くいまさすや。即ち復一衣を脱ぎて王に與へて之を敷く。王の臥たまふを見て長
 跪して脚及び餘の肢節を案で王の疲勞を解く。黃頭女の身は天身の如く細軟妙好なる
 こと比なし。王は其細滑に觸れて愛着心を起し念言すらく、未曾有なり。斯の如く
 の女聰明にして我未だ教へざるに悉く我念ふことを與ふ。王問うて曰く、汝是誰が家
 の娘ぞ。答へて白さく、妾は是耶若達が家の婢使なり、妾は園を守る者なり。語る時
 に王の大臣等が王の車の迹を尋ねて園中に來詣り王の足を跪拜して一面に立てり。王
 一人に勅して汝耶若達婆羅門を呼來れと。婆羅門王の所に詣て禮す。王問うて曰く、
 此女是汝が婢なりや。答へて曰く、然なり。王の言はく、吾今此婢を取て婦と
 爲んと欲す、汝いかに思ふ。報へて曰く此是婢使云何ぞ婦に勝へん、王の曰く、苦

しきこと無し、但し價值幾干ぞや。婆羅門曰く、價值百十兩の金を論ずべくも、何にして王の價を取り上らん。今畏みて王に奉らん。王の言く爾らず、我取つて婦に爲んに何ぞ値を與へざらんと。百十兩の金を與へて即ち迎へ載せて宮に入る。衆臣衛從す。未羅園中より將ひ來る故に未利夫人と名づく。王甚だ愛敬して五百女人中立て第一夫人と爲す。其時に於て高殿上に於て自ら念言すらく、我何の業報因縁を以てか婢使を免れ如是の幸福を得たる。是全く我先に密を和せる乾飯を分けて沙門に施與せり。此因縁を以て此に至れり。終身此恩を忘れざらんと。

三 羯摩 姫

佛舎衛國に在す時に難國の王あり、分和檀と名づく。大に道を好み日に千餘人の道士を供養す。王自ら謂らく、我智慧雙び無し、鐵を以て腹を縛り常に智慧の溢れ出るを恐るると云ふてをる。子の嫁を求むるに群臣に問うて曰く、天下に我智慧に及ぶ者

あらば我子の爲に其女を娶らんと、國內を求むるに一人もない。王使を舍衛國に遣して彼人民に問ひければ、曰く我國に佛あり、智慧第一なり。若し然らば其佛に女ありや否。答へて、本より道人なれば女有ること無し。然らば其次は誰ならん。答へて阿難が抵賢善にして道を好み女ありて第一なり。使者云く、何を以てか第一とす。答へて曾て太子祇陀と共に園田を諍うて持て佛に上り衆に黄金數千萬億を布施して貪らず、但善を志す。使者即ち阿難が抵の所に到て其容子を見てから還つて王に白し上げた。すると王は忽ちに馳せ往いて見けるに難國王身に衣服なし。裸形黒醜の狀が鬼の如くである。阿難が抵問うて曰く、君何をか求めなざる。王曰く、聞く君賢善にして道を好み女ありて第一なりと、實は君が女を我子の爲に娶らんと欲する。阿難が抵は難國王を呼び前めてそこに座せしめ、速に佛に啓し上げて女を嫁すべき哉を問ひ上る。佛は其女を與へよと仰せられた。阿難が抵曰く、彼は實に鬼の如し、或は女を殺しはせぬかと慮ると。佛の曰く、然らず、後還つて彼國民の爲に眞實の利を得

せしむるが故に與へよ。當に難國に於て八萬人を度すべしと。其命に隨つて遂に女を
與ふることに決した。其名を三摩羯と云ふ。女を難國王に與ふ。禮聘して迎へて其國
に還る。國に到て後太子其夜三摩羯の所に到るに、三摩羯は脚を以て跣む。太子地に
却ぞく。是の如く四五日、太子恐れて敢て復近づかず。王の夫人問うて、何故に子は
行かざるや。太子默す、夫人が即ち三摩羯の所に往て、御身は我子の妻ではないか、
宜しく敬事すべきものを、然るに何故にか還つて折辱なさるぞ。三摩羯曰く、夫人も
太子及び國中の人形皆狗の如く畜生と異なることなし。故に足を以て蹋むなり。夫人之
を聞いて王に白す。王は智慧無雙なり。子の婦を求めて畏るる所なし。我子を折辱め
復まのあたり我を罵ると。王は之を聞いて三摩羯の所に到るに女は出でて禮拜せず。
王の言く、我遠く子の爲に御身を娶る、面たり夫人を罵り復我子を折辱めて之れ道に
契ふやと、問ひければ、三摩羯毫も怖れずして曰く、王よ此國中の人民皆狗の如くで
ある。王は其言に驚きて曰く、我常に智が腹より溢れ出づるを恐るる故に鐵を以て縛

る、而して日々道士千人に供養す、誰か能く我に及ぶ者ぞ、而るを反て罵らるゝ何故ぞ、羯云く、王よ見玉へ男女長少皆裸形にして相向ふ。假令福を修するも尙狗に食を與ふるに等しと。之を聞いて王は、師の門に詣つて具さに上の事を陳ぶ、師の云うには、更に往きて復問ひ玉へ。慎んで怒り玉ふ勿れと。王また還つて問ふ。汝が國の人民は何が勝れて居るか。三摩羯曰く、我國の男女皆衣裳を着し尊卑位を異にし身を露さぬ。大人ありて佛と名づく、國中の人民を教化し皆な清き道を得て居る。而して佛は火に入ても焼けず水に入つて濡れず、能く三千界の天地を覽、三世の事を知り玉ひ、身に三十二相八十種好あり。道法通達し玉ひ上諸天も禮拜す。王の曰く、然らば其佛を見上ることを得らるや。羯の曰く、佛は神通自在に在ませば遙かに請じ上れば來らせ玉ふ。王曰く、大に善し、然らば云何にして禮す。但香を焼いて王も及び夫人太子も悉く我後に隨つて禮し玉へと、羯女高臺に上つて請じて白さく、難國王始めて如來の御名を聞いて御德を慕ひ上る。願くば如來よ明日王の供養を受け玉へ、と請じ

ける。佛は遙かに之を知しめし、目蓮及び諸の比丘に勅して悉く難國に往き玉ふ。羯及び王夫人太子は齋戒し焼香し席を布き食具を設けて待ちければ、佛は千二百五十人を先に遣はし佛御自身は後より來りたまふ。大弟子衆各々種々の形像を示現し皆不同天上より下りければ國民大に驚怖す。羯の曰く、汝等怖るること勿れ、佛は最後に在り、神變を以て身より水火を出す。三摩羯前んで佛に向て禮をなし王及び夫人太子も之に倣うて禮を爲す。大弟子座に就く、順序整然たり。竭女及び王夫人太子は次いで澡水を行ひ飯食具を備へける。さて其國の人民は王の門閉づるを怪しみ、大に怒て各々斧を持て宮門を斫らんと欲す。佛の曰く、恐るる勿れ我今彼の愚なる人民をして心を改善せしめんと。宮壁をして化して水精と爲し内外相徹見す。人民驚き復た斫らず。時に賓頭盧、山に坐して忽ちに難國に到る。出るに先だち、針を地に刺し縷と衣を相連り神足を以て飛び行く難國に到るに山が後よりつき來る。國の一女懷妊せるが山の來るを見て墜ちはせぬかと恐れて胎兒の身を墜して死なしむ。かやうな行動を爲

せし故に、佛目蓮を以て賓頭盧を戒めて已後佛に隨ふことを許し玉はざりし。王は佛に白して言さく、佛よ我は智力無雙なり、共に道力を播べん。若し如かざる者は當さに井中に投すべし、佛の曰はく、大に善し、三たび問うて如かざる者は當に井中に投すべし、佛問て言く、若し誦經の時に云何、王の曰く、我誦經の時匍匐して行く、極まれば地に伏す。佛の言く、我誦經の時に坐す、坐極まれば經行す。王よ若し匍匐して誦經するを狗行と爲す。王如かざる爲に王を井に投げんと欲すれば兩手地に據て肯て入らず。佛の曰く、之を助けよ。即ち佛道を奉行せしむ。王及び夫人太子等悉く佛の正化に歸し難國民は闇黑の中より光明を得たり。後には王夫人太子も全く精神的に復活し來れば、三摩羯は法によりて王夫人太子に敬事し難國の民は此正法に歸して大に利を得たり。

三摩羯本と開明せる國に成長して後未開の國に嫁す。身を犠牲にすれども後に彼國

民を化度すること無數、一粒の米實は身を腐らして後に數千の果を結ぶに至る、宜なる哉。

阿質王を度す

阿質王の治むる國周圍十萬里、人民熾盛である。王武勇絶倫なれども法を解せず、霸氣の鋭き王である。隣國を侵伐し善良の人民を苦しむ。隣國悉く苦しむ。佛大衆と共に其國に到らんとす、阿質王を聞く、その三十二子身皆勇健唯鬪諍を好み殺戮を事とす。兵を擧げて大道に當て佛を拒む。佛は阿難に告げて、阿難よ、阿質國の王が父子間日惡意を以て我及び大衆を害せんとす。汝等は何を以てか之を淨化すべきぞ。諸の大士天人等笑つて天地を動かす。佛問うて、何を笑ふや。阿難曰く、阿質王を笑ふのみ。佛の曰く、阿質は愚痴にして是く惡意を以て民をして罪を造らしむ。已に大兵を發し人馬の力を恃みて當らんとす。彼軍たとひ四天下に滿てるも我が一毛をも

動かすこと出来ぬ。阿難よ、諸の明士に勅して皆鉢を持つて明日阿質王の軍中に於て
 飯を取るべし、と告げて翌日王の所に至れるに、王父子が兵馬盛にして鬼神を欺く勢
 である。時に佛自ら前に在て大光明を放ち軍中を照せば、阿質國王の鼓亦鳴らず、
 弓弩もひけず、刀は抜けず、象馬は顛覆し、歩兵は轉筋し、天地は暗く日月は光無し。
 王及び諸子皆迷惑して度を失ひ頓伏して走る。佛大衆はよりて飯を取て鉢に満て、前
 んで王國に到れば城門自ら開きぬ。佛王宮に進み殿に入て坐し玉ふ。寂寞にして聲
 なく數萬の天人悉く座に就くも宮更に廣大なり。自然の高座交露の寶帳五音自ら
 發す、王と諸王子相謂て曰く、王者の力道法の力に如かず。士衆驚怖す。諸の王子曰
 く、今聞く佛已に入て宮内に在ます、宜しく遷つて佛に相見えんと。王の曰く、復何
 の面目ありてか佛と相見ん。上鬼神に慚ぢ下人民に負くと曰ひければ、諸王子曰く、
 佛は仁慈ありて人の意を傷ひ玉はず、王便ち士衆を收めて安徐として宮に還る。王は
 佛に相見え奉り頭面地に著けて佛に向つて禮を爲す。人格に接すれば忽ち人格化の大

なる、其人格の光明王を反照せしむ。前んで佛に謝して言く、身卑賤闇陋にして學問せず、禮儀を知らず、狼獸に比しく愚痴迷惑にして天人に違犯す。大聖顧みず、今世尊遠く鄙土に來臨す。君臣悖逆なり。惟願くば天尊此無智を哀れみ大悲慈を以て此人民を教化し玉へと。王頭面を以て禮して退けば王が三十二子、公卿百官吏民皆過を悔ひて自責して一心に佛に向ふ。王は數多の神人皆師子の座に就くを見て交露の帳中自然に音樂あり。佛力の不思議を知り、王は後宮夫人採女に勅して皆禮敬せしむ。又百味の飲食を設け夫人三十二子と澡水を行じ、自ら斟酌して食を供し上つる。王は進んで稽首して佛に白して言く、天中天の恩を蒙り宿福の厚き先君の助として黎民の上在るを得たり。天尊大聖よ、我國の人民を哀れみたまへ。戒を乞ふて終身奉行し武を治め正平を祈り、何の法を以て隣國に同盟を爲し、惡を去り善に就かしめん。願くば世尊意を留め玉へと。佛の言く、王よ、侵伐は義に非ず、長生を求め社稷を安ずるものに非ず、王當さに恩信、仁義、慈度、貞深、寬柔、忍辱、布施、育民、覆蓋、

怒己どよき、凡およそ此事このことを行おこなはば長ながく社稷しゃしよくを保たもつべし。若もし此この九則そくなくば社稷しゃしよく保たもち難がたし。王わうの曰いはく、之これを如何いかにせば之これを爲なすことを得えん、願ねがはくば教をしへを垂たれ玉たまへ。佛ほとけの言ことはく、衆生しゆじやう哀あはれむべし、人命じんめい惜をしむべし、國土こくにの珍寶たから恃怙たうむに足たらず王わう當まるに人命じんめいを愛惜あいじきすること父母ふはの其子そのこを哀あはれむ如ごとくすべし。人民じんみん王わうを親かろとして父母ふはに過すぎん。天下てんか萬國ばんこく皆得みなえて保たもつべし。但たゞ一國こくのみに非あらず、王わう數百萬すうまんの衆軍兵馬しゆじんへいばありと雖いへども適あたる小敵せうてきを拒とせぐべきのみ。我われ菩薩ぼさつの道みちの爲ために樹下じゆげに坐禪ざぜんす。魔王鬼神まわうきじんと一億いっおくの兵皆形へいみなかたちを變へんじて我心わがこころを壞えせんと欲ほつす。我われ神力しんりきを以もつて右手みぎて指ゆびを以もつて地ちを案あんすれば天地大てんちおほいに動うごき皆悉みなことごとくく顛蹶てんけつして本形ほんぎやうに復ふくするこ

と能あたはず、魔王まわを降伏かうふくす、王わうが曰いはく、實じつに愚痴ぐちにして智ちなし、王わう慚ざん謝しゃして更さらに改勵かいれいせんとことを乞こふ。佛ほとけの言ことはく、我大慈われだいじを以もつて一切人民いっせんじんをして道みちを得えせしめたし。末道みだうの者ものは但王父子たうわうふしのみに非あらず。王悔責わうくわいせきして佛ほとけに願ねがふ。我われを哀あはれみ更さらに教誠けうかうを受け上うり終身しうしん奉行おややうし國民こくみんを安穩あんあんならしめん。佛ほとけ曰いはく、王わうよ、當まさに刑罰けいばつを寛ゆるめ賦斂ふれんを輕かるくし恩信おんしんを廣ひろくし孤獨こどくを給きうし囚人しうじんを赦ゆるし窮者きうしやを救すくひ貧者ひんじやは之これを饒ゆたかにし飽者きしやには飢あかしめよ。王わう若

し是の如くせば其終始を保つべし。王御教によりて道心を發し左右の臣に命じて寶藏の珍寶を取て世尊に上りければ、佛哭願して悉く王の左右に施し玉ひ、皆饒富を得たり。三十二子自ら相謂て言く、生れて無義の人と爲り死して無義の鬼と爲らんよりは我等兄弟沙門と作つて道を修めんには如かじ、佛の言く大に善し、俱に佛の所に詣て具さに所懷を陳ぶ、佛其意深く道慧に入るを知りて剃度し玉ふ。後宮夫人姪女悉く一切人民皆五戒を受く、國豐み隣國之を聞いて遙かに敬ひ仰ぐ。王是より治國寛仁盜賊有ること無し。男女相敬つて相貪欲すること無し。普ねく和合す。王精舍を建て國中の人民に法を聞かしめ俱に善行するに至れり。

藍 達 王

舍衛國の藍達王位に即く、法則と風俗轉薄して治行平ならず、百姓を苛枉し横までに辜無を誅し、正亂の禍應雨澤時あらず、五穀實らず、互に妖怪を生ず、遂に土地荒廢

す。されば王は危きを懼れて邪道に奉事す。又妖神を祀つて上下相習ふと風草の靡くが如し。黎民亂を樂ふて競ひて姦邪を爲す。強者は弱者を凌ぎ更に相傷殺す、風教壊敗し又大旱三年を踰ゆ。前後請禱すれども一回も雨降らず諸師王に白さく、今大に神に祠るべし、童男七人白牛白馬各十頭を焼いて天を祭りて雨を祈るべしと。王これに従ひ、國中克々大小搔擾たり。時に佛目連に告げ玉はく、藍達國土荒れ人民勤苦す。彼國の人民汝に従つて得度すべし。往いて開化せよと。目連は命を被りて往いて說法して其意を解かんとするも、國中人民受くる者無し。目蓮大鬼神と化作し身長數十丈、城門に在りて洪聲に王及び近臣を呼んで出さしむ。君臣惶惑し自ら懼れて安からず。王即ち近臣を將て頭を叩て自ら陳ぶ、唯生活を願ふ。神は王に謂つて曰く、臣として忠ならず子として孝ならざる者あれば急に率いて來れ、吾之を食はん。王即ち推問して答へて曰く、有ること無しと。神復王に謂つて曰く、急に偷盜者姪佚者兩舌者、人を中傷する者人を惡口する者あれば吾之を食はんと。王即ち推問して又無しと

答ふ。神復王に謂つて曰く、飲酒の者あれば吾之を食はんと欲すと。王復推問し無しと答ふ。是に於て目連復自己の身を現して往きて鬼神と共に語る。王は目連を見て頭を叩て願ふ。請ふ大神の心を解いて釋して玉へと。目連王に問ふ。神は何を求めなされしか。王の言く、惡人を食はんと欲すと。目連問ひて曰く、國中信に此輩ありや。王の言く無し。願くば我終身道人に歸命せんに依つて、目連大神に語つて云ふ。此國中の人民卿が覺る所の者有ること無し。卿其罪を赦すべし。若し復犯す者あらば更に來つて食ふべしと。神其言を聽いて忽然として去る。王及び臣民俱に頭を叩て罪を謝す。王及び臣等は今より誠に誠に道人に歸命せんと云しかば、目連告げて言く、王若し歸命せんと欲せば宜しく先づ佛に歸依すべし。玉は佛の功德を問ふ。目連説いて、佛は三界の獨尊、所説の法、聲三千界に聞ゆ。王言はく、吾今幸に聞くことを得たり、願くば佛を請じて尊法を受けて、終身奉行せんと、王沐浴清淨にして佛の在す方向つて稽首して禮して曰く、吾れ闇昧を以て誤つて民の上に處り洗心率道すること

能はず、國をして荒敗せしむ。咎我身に在り、唯願くば天尊光を垂れて降下し普ねく黎民をして無盡の利を與へ玉へと念すれば、佛は諸の弟子衆と共に來臨し玉ふ。佛自然の師子の座に坐し玉ふ。玉手づから飲食を斟みて躬澡水を行し、呪願終れば佛は苦空等四諦の法を説き玉ふ。王歡喜して授戒を受け結縛解けて法眼淨を得。王の事ふる外道等も悉く化度を蒙むる。其國正化に歸して豊かに大に治まれりと。

上王侯より下庶民に至るまで人には靈性と人性とを具有す。若しミオヤの光に觸れて靈性開く時は光明の中に各自己の天分を全うす。闇黒なれば各其分を守らず顛倒して自ら冥くして衆と共に現在よりして永く惡道に向つて墮落す。人生ミオヤの光を仰がずして可ならんや。

五百の賊を度す

舍衛毘舍離の二國に賊多し。互に相抄め奪つて人民安きことなし。舍衛國の王謂へらく、我此國の王なれば賊を却け民を安せんと。即ち將士に勅して曰く、汝等追捕して賊を擒にせよ。時に舍衛の僧侶が安居竟つて毘舍離に詣らんとして道を誤まつて彼の賊の中に入る。時に比丘問ひて曰く、長者よ汝何に去るや。答へて毘舍離に向ふと。僧復言く、共に伴を爲さんと。彼等答へて言く、我等は實は賊である。榛木を経渉して行くに路を擇ばぬ、汝は是善人なれば我らに隨ふ勿れと。僧復請ふ、願くば我を連れられよ、語る言未だ竟らざるに追捕が來りて僧と共に合捉して將ゐて王の所に至りて、此者は群賊なり。王の曰く、先づ僧を將ゐ來れと。乃ち王の曰く、汝は出家人なり、何故に賊を作せしや。答へて曰く、我は賊に非ず。然らば何故に相隨ふや。僧具さに上の事を以て王に白す。王また賊に問ふ、此出家人は是汝が伴なりや。答へて是伴なりと。更に比丘を喚びて問ふ、汝妄語して官を欺く、賊の方にては汝是伴なりと云ふに何を以て非と云ふや。答ること初の如し、王勅して之を放ち、賊は法

の如くに治す。五百の賊を取つて、迦毘羅華鬘に著く、鼓を打つて巡令して將に殺さんとす。賊大に啼き喚く。佛知り玉へども故らに問ふ。比丘答へて曰く、世尊よ、是五百群賊王に殺されんと是其聲なり。佛阿難に告ぐ、汝往いて王に語れよ、汝是れ人王、民を慈しみて子の如くすべし。何ぞ一時に五百人を殺すやと。阿難は教を受けて王の所に詣つて具さに佛語を説く。王曰く尊者よ、我能く此事を知る、一人を殺す罪すら尙重し況や五百をや、但數次聚落を壞り人民を抄掠するが故なので、若し世尊が教へて賊を作さしめざれば放ちて活かさしめんと。阿難具さに佛に白し上る。佛阿難に語るらく、王に能く語りて放たしめよ、我此人をして今日より後更に賊を作さざらしむ。阿難教を受けて先づ刑處に到り監殺者に語りて言く、此諸罪人世尊已に救ひ玉ふ。則ち殺さざるべし。即ち王命じて、縛を解かす。送つて世尊の所に詣でしむ。世尊彼等を度せんが爲に露地に坐し玉ふ。賊遙かに世尊を見上り繫縛自解いて頭面に禮を作す。佛其縁を觀し布施、持戒、行業、報應及び四眞諦の法を説き玉ひしかば、法

眼淨を得。問ての玉く、汝等出家を樂ふや否や。答へて曰く、世尊先に若し出家せば此苦に遭はざりし。唯願くば出家に度せしめ玉へ。佛善來比丘と唱へ玉ひて、五百の賊は舉身の被服を變じて之を衣と爲す。儀容舊比丘の如し。

三年の闇室も開く時は日光入て急ち明し。

清き沙彌

爰に徳高く學識に富めるカセウと云ふ高僧あり。四邊の道俗を徳化すること盛なり。安陀國に家富みて道を好み深く三寶を敬信する信家ありて自ら盟つて其高僧に終身供養することを許されて、日々に供給物を遺送して怠らざりき。また其國に一の最も篤き信佛家の長者に一の男子ありて、之を出家せしめんと欲して善き師を選みて竟に迦葉尊者の許に往いて願うた。此一子を御弟子に奉らん、唯願くば大德尊者よ哀みて納れ汝度し玉へと。爾時に大德靜坐冥目して道眼を以て觀するに、此兒出家せば淨

戒かいを持もし得えることを認みめて承しょう諾だくなされて佛ほとけの法はふとして三年ねんかん間は沙彌しゃみ戒かいを受うけて終身しうしん出家けさ遂さげ得えらるるや否いなやを試こころみたり。之これを沙彌しゃみと云いふ。此この青年せいねん沙彌しゃみの聰そう明めい智ち惠い群ぐんを拔わき容よう貌ぼうの美びにして衆しゅう人じんに敬けい愛あいせらる。高かう尙せうなる理り想きやうと志し願がんの深じん廣くわうを懷いだきひたすら學がく道だうを事こととして餘よ念ねんなかりき。師しの尊そん者じゃの施せ主しゅが或ある日ひ其その親しん族ぞくの居士こじの家いへに客きやくに招まねかれてゆく。其その朝あさ念ねんへらく、今日けふは請こひによりて會くわいに招まねかれてゆく。誰たれか舍いへを守まもらるるやと。其その家いへに一の女むすめあり、父ちちに白まをさく、唯ただ願ねがくば吾わが父ふ母はよ皆みなの僮わし僕つわひを召つ伴ぱんれて往ゆき而しかして彼かれ等らに滿まん足ぞくを與あたへ玉たまへ、家いへは妾わたくしが留る守すして居ゐるが故ゆゑに案あんじ給たまふ勿なかれと。父ちちは之これを聞きき安あん心しんして全家ぜんか悉そくく之これに趣おもむきし。女むすめは堅かたく門もんを閉とぢて獨ひとり留る守す宅たくを守まもつて居をつた。さて此この日ひは檀越だんごつ仰あまり忽そと々くしたので大德だいとくの許もとに食しよくを送おくることを忘わすれけり。爾そのとき時に大德だいとく念ねんふにもはや日ひも晚くれんとするに施主せしゅが食じきを送おくらざるは、用事ようじ多おほき爲ために忘わすれて居をるならんと。即すなはち沙彌しゃみを遣つかはして食物じよくものを取りに至いたらしめける。沙彌しゃみは外ぐわい出いしゅつにも善よく威儀いぎを攝おさめて其家そのいへに趣おもむき門かどを叩たたきければ、女むすめは問とふ。何方どなたにやと。沙彌しゃみ答こたへて、我われは師しの爲ために食しよくを取り

に來りし沙彌なり。是女は其端正にして容貌の殊妙なること世に倫ない。年始めて十六歳、至つて伶俐なる女である。時に女は此の沙彌の賢明にして志氣高く容貌方正にして實に愛すべき美少年なれば常に愛慕戀念して止まざりし。圖らざりき獨り留守の家に美少年の沙彌の來ること、と門を開きて家に納れければ女は豫て胸の裡に燃えつつある戀念の火は沙彌の前に於て諸の妖媚を作して深く欲相を演じたり。情欲に毫も心なき沙彌は其狀を見て、念言らく、此女風癘の病にや有る。又何の爲に斯る相をなすやを知らずと。堅く威儀を嚴かにして顔色も變せず。女は五體を地に投じて啼いて沙彌に白して言ふ。君よ妾が常に胸の裡に燃えつつある悶を君は知り玉はずや、妾が常に君の爲に思ひつゝある秘事を今日は陳べんと欲す、此舍中に珍寶倉庫あり、寶藏に無盡の寶あり。悉く是君の所有にせば本望なり。妾は而して君と同棲して最も幸福なる世を送らんと欲す。君が御種を以て此家を嗣がしめ及び財寶までも悉く譲りて子孫の繁榮を圖らば是世の最も光榮とする處、唯願くば妾が一生の念願なれば君よ聽許

し玉へと。恨む如く訴ふるが如く哭いて身を沙彌に投じける。沙彌は其女の執念の深きに驚ろき、然れども自ら念す、我一たび菩提心を起し高く無上の道を得んと欲し志氣高節して自ら清白を守りし、我寧ろ命を捨つとも禁戒を毀さざらん。聞くならく昔日比丘あり、姪女の家に至る時にたとひ身を火坑に投ずとも欲を犯さじと。又諸の比丘賊に劫奪せられ草を以て身を繋がれ風吹き日に曝され諸の蟲に咬食せらるるも戒を護るが爲に草を絶つては去らざりきと。また鵝が珠を呑みたるを比丘は見ると雖も戒を持つ爲にそれを殺されんことを恐れていかに自分打擲を加へられても鵝の珠を呑みたることを語らざりしと聞けり。兼て古徳の古へを偲び己が將來の志願を思ひ大に決する處あれば方便して語つて曰く、女よ今君の念願の程を聞けり、就いては暫らく我が爲に能く思考する時間を與へ玉へ。我を一房の中に納れて門戸を閉ぢて暫く所作を爲さしめよと。女は沙彌が能く考へた上に自分の望を稱はせ呉るものかと思ひて戸を閉して一房に入れ置いた。沙彌念言すらく此女執意甚だ堅し、若し我其れに順は

ざれば或は自殺するならん、我は已に宿世より道に志して假令死すとも道心退かじの
今此の女死せば必ず三塗に墮せんこと必せり。彼は我師の檀越の女なり。若し此をし
て闇黒の中に墮せしむる如きは實に忍びざる處、彼女の爲に遺書を遺して彼をして道
心を發さしめんと。即ち『人身受け難し佛法又遇ひ難し。此形體の契りは唯流轉の業
のみ。女子よ若し我を念はば専ら佛法を愛せよ。我身は唯四大の假和合。眞理の光明
のみ我と汝との永遠に俱にすべき法なり。我は此假の肉を捨て汝を永恒の光に導かん
と欲す。汝眞理の光と結婚せば即ち我と永遠の契縁を成したるなり』と。沙彌は遺書
を認めて後一の刺刀を以て身の衣服を脱ぎ架上に置き合掌し跪き、拘尸那城佛涅槃の
方に向て自ら誓願を立て、我今佛法僧を捨てず我は法の爲に此身命を捨つ。願くば永
遠涅槃の光明の中に往生し眞に清められて眞正の道を成せんと。自ら頸を割いて死
す。時に女は沙彌の遲きを怪しみ戸を開きて看れば其の已に死せるを見る。女は本心
を失ひ欲心尋ち息み漸結懊惱して悲呼悶絶す。父は會より還りて見れば女の斯の如き

の相を見て水を灌ぎなどして稍正氣に爲れば其故を問ふに、具に實を以て答ふ。父房に入りて沙彌の身を見れば鮮血身を汚し赤きこと檀栴の如し。禮を爲して讃して曰く、清く節を守ること雪よりも潔よし。前途望多き美少年、正法を愛して身命を惜まず、身死しても靈に活きぬ。ア、讃むべき哉。彼國法として若し沙門白衣の舍にて死するあれば當に金錢を以て冠す。時に優婆塞は一千の金を以て銅案の上に載せて王宮に至り白して言さく、大王よ我罰謫あり應に王に入れんと欲す。願くば之を受け給へ。王曰く汝は國中唯一の信佛家である。言行違ふことなし。何の過を爲してか處罰すべきぞ。時に優婆塞具さに上の事を陳べ自己の女の過ちを毀り沙彌の清節を讃歎す。王は聞き給ひて悚然として告げて曰く、沙彌の淨戒を護る爲に自ら身命を捨てたのであれば汝には罪咎は無い故に其金錢は家に持ち還れよ。實に其沙彌は感すべきもの、吾今躬ら汝が家に至り清きその沙彌を供養せんと。王は其の沙彌の志を感じて自き往きたまひ、其清潔なる志節を感じ、種々の寶を以て高車を莊嚴して死沙彌を載て平坦の

地に至り、衆の香木を積みて閼維供養す。また是女をも嚴かに飾りて世の殊勝なる相を高顯の處に置きて普ねく時に會する者の凡てに見せしむ。衆人に語つて曰く、是女殊妙なる容暉斯の如し。欲を離れた聖者ならざれば誰か染心なからん。此沙彌既に未だ道を得ざる生死の身を以て淨戒を奉じ志節の潔白なる、身命を捨てて禁戒を犯さず、甚だ稀有ならずや。王はまた其師を請じて廣く大衆の爲に微妙の法を説かしむ。一切の見聞する者出家を求め無上菩提心を發すもの多かりしとぞ。

沙彌は法を重んじて身を顧みず、肉に死して靈に活く、其志節の高潔なる是當に偉なり。王が其沙彌の爲に頌表し給ふ事亦偉なり。

沙彌龍女に愛執して業成らず

昔羅漢ありて沙彌と山中に道を行したりき。沙彌日々王人の家に至つて飯食を乞ふ。提基の上を經過するに危険極りない。常に躓いて地につけば飯が泥で汚るる。そ

こで沙彌しゃみは汚よごれざる分ぶんを師しに供きようして汚よごれたる飯めしは洗あらつて自みづかく食くふ。是この如ごときこと度々たびであつた。師し曰いはく汝なんぢ何故なにゆゑに飯めしを洗あらつて食くふ哉や。答こたへて、乞こひに行ゆく時ときは晴はれ、還かへる時ときは雨あめ、提基つみにて地ちに蹟つまづき飯めしを覆くつす故ゆゑなりと。師しは之これを聞きいて默もく然ぜんとして思おもふ。是龍これりうが沙彌しゃみを燒つのである。便すなはち起たつて提基つみの上うへにて杖つゑを持もちて叩たた擲きふと龍りうが化くわして老人らうじんと爲なりて來きたり頭面づめんを地ちに著つけて禮れいす。沙門しゃもん曰いはく、汝なんぢ何ぞ我沙彌わがしゃみを燒つるや。答こたへて、實じつに其その容貌ようぼうを愛あいするのみ。今日けふより始はじめて日々にちくわがへや我室わがしやうにて供養くやうせんと。沙門しゃもん其請そのこひを受うけて日々にちく往ゆいて食くふ。沙彌しゃみが後時のちに師しの鉢中はつちゆう兩三粒りゆうさんりつの飯めし非常びひやうに美味みづかなるを食くひ、師しに其故そのゆゑを問とへども默もくして答こたへぬ。或日あるひ沙彌しゃみが牀中しやうちゆうに入り手てに牀しやうの足あしを取りて和尚ぜんぢやうの禪定ぜんぢやうに隨したがつて俱ともに飛とんで龍宮りうぐうに到いたる。龍りう及び龍女りうによども俱ともに沙門しゃもんを禮れいす。復沙彌またしゃみも禮れいす。師し即すなはち之これを覺ぞとつて呼よんで沙彌しゃみに語かたつて聞きかせけるは、此これは姝女うねめでない。實じつは畜生ちくせうである。沙彌しゃみよ汝なんぢは未だ道みちを得えぎるとも心こころは三十三天さんさんてんに生うまれ此これに勝まさること百倍ひゃくばいの福樂ふくらくあり。されば之これを見みて意こころを著ちやくすること勿なれと。沙彌しゃみの曰いはく、龍りうの居ゐる處世ところよに希有きゆうなり。師しの曰いはく、彼かれに三

の苦あり、一に百味の飯口に入るとも化して蝦蟇となる。二に姦女端正無比なるも夫婦と爲らんと欲すれば兩蛇と爲つて相交る。三に龍の脊に逆鱗あり沙石其中に生じ其痛み心胸に達す。此の大苦あり。汝何に因てか之に従ふ。汝は未だ道を得ず。鬼道及び國王の内事は見てはならぬのである。沙彌は聞くと雖も應ぜず。晝夜に思想して彼の龍女を思ふて食はず。遂に病に死し魂神生じて龍の子と爲ると。

人のアラヤ識は業に随つて轉ず。人は其深く執着する處に業識を成熟す。已に熟する時、例へば植物の果實の熟したる如くに未來の身を受くべき種因已に成じたるなり。身未だ人の身たるも其のアラヤ識は於て六道種々の受生の因を成せり。豈慎まざる可けんや。

死後の樂より現在の光明を求めよ

舍衛國の東南の海中に臺あり。上に華香の樹木ありて如何にも清らかなる處である。婆羅門の女子たち數多集りて其教に隨ひ其道を奉事して勇猛精進につとめて居る。彼等未だ佛世尊の世に在ますを識らず、其女子等自ら相謂つて言く、我等生を女人に受け、少より老に至るまで、唯三事の爲に監督されて自由を得ぬのは歎しいことである。幻夢のやうな此世に長らへんよりは寧ろ死して彼の梵天國に生れて長壽不死自在を得た方が増しである。ついて我等は是より香華臺上の香華を採取りて精進して持齋し梵天に祈願して尊神を屈せんことを願うてをる。佛は遙かに彼女子等の心が化度すべきを知り玉ひ、即ち神通力を以て行いて先に臺上に至り樹下に坐し玉ふ。諸女子は遙かに瞻みて歡喜して是梵天なりと謂ひ、自ら相慶慰し我所願を得せしめ玉へと祈りければ一の天人が女子等に語りて曰く、女子の衆よ此尊は梵天に在まます。是三界の最尊にして佛と號す。人を度すること無量なり。諸の天神衆も悉く歸敬し奉る處の聖尊なりと。之を聞いて諸の女子佛に白して言さく、妾等心に垢多く今女人と

生れ常に監守せらる。願くば梵天に生れて自由の身と爲らんことを望む。請ふ得らるべきや。佛の言く、諸の女子よ、善く此願を發せり、世に二の事ありて其のつとむる處の報が明審である。善を爲せば福を得惡を爲せば殃を受く。世間の苦天上の樂も實には有爲の煩累免れ難い。眞實無爲の光明を得て初めて眞の安穩を得らるべし。能く選擇して其の眞理を求めば永遠の靈福を得らるべしと。世尊は有爲の苦樂と無爲永遠の光明に入るべき道とを比較して説き明し玉へば、諸女は道を求むる熱心と私なき至誠とは兩方を明かに照しわけて眞の道を求めんことを願はれたり。世尊また頌を説いて示し玉ふた。

孰か能く地を擇ぶ、監を捨て天を取る。誰か法句を説く善華を擇ぶが如く、世の坏は幻法忽有に喩ふ如く、魔を斷ち華開けば便はち死を超越す。

諸女偈を聞きて能く自ら思惟して眞正の我等を永遠の光明に入らしむる法は、囚れし世を捨て天を取ると云ふ處ではない。我等が幻のやうな有爲の世を離れて眞實の心の

華が開くればそこに生死を超越する處の光明が発見するのであると悟りて彼女等は深く信心を發して御弟子と爲りてつゐに眞の道果の光を得たりといふ。

世の中に厭世的の信仰家は唯沙婆の苦を厭ひ淨土の樂を求むる今の女子等の如きの輩あり。若し未だ自己がミオヤの子にしてミオヤの光明を被むりて自己の改造を爲すに非るよりはいかでか眞の靈福を得らる可きを知らず。

好徳夫人（心靈の貴きは眞の貴きなり）

舍衛城に孤獨の母に一女あり。年始めて十七、顔貌端嚴にして世に比なく、貞賢明達にして博く經書を學び節を守りて門を出でず、母は乞食して身命を支ふ。其女の天稟秀でて高尚なる理想深遠なる志氣其威儀嚴にして王道に近し。常に二の願あり。一には我は王に嫡して國母と爲つて一國の範を爲さんと。二には願くば尊き神尊に事へ

て心靈を聖めんと。時に其國の王國內に光行し給ふ時に當り其女の舍の門上に鳥の鳴くを聞き、王弓を以て鳥を射けるに、鳥王の箭を持つて飛で女の家に入る。王の侍臣鳥を追うて舍に入る。女は面を露はさずして但箭のみを外に擲ぐ。王巨指を見て此女の非凡なることを知る。其後王第一夫人卒す。夫人を娉求するに徳の應すべき者なし。廣く問ふに、左右白して曰く、曾て鳥を射る時に窮獨の母の女十六七面を見ずと雖も、手を瞻聲を聴き、此貴人なるを知る。王の使往きて視呼將ゐて共に來れよ。また相師をして占はしむ。王使女の門に至り直ちに内に入る。女の母在らず、唯獨り女子のみ住す。王の使女を呼んで出でしむ。三たび呼べども應へず。使曰く、貧家の女出て來れよ。女對へて、才あるも不才なるも各一家の子なり。卿は是何人ぞ。無法にも名を刺ずして我舍に搪突す。速に門外に出でよ。使人曰く、國王我を遣はして汝を呼ぶ。汝は是小家の子、何ぞ敢て應せざるや。女曰く、國王何事ぞ汝を遣はして來らしむ。若我を求めて婢と作さんには我家王法を犯さず、若し我を求めて婢と作さんには

汝曹は是我給仕なり。何ぞ禮を以て向はざる。貧門を輕易し權柄を以て女子を脅迫す。女子微なりと雖も自ら天德を有す。王威の爲に屈せず。汝曹宜しく王に啓し上げよ。使人具に王に奏す。王使はち百官に勅りして嚴かに禮儀を備へ數千の採女を從へて往て之を迎ふ。使者種々の納娉の饌を齊持して使者白蓋の車五馬引御して女を迎ふ。前導の騎兵數萬、從車千乘、從者數萬、鐘を鳴らし鼓を撃ち行列し使者車より下りて謁敬を通す。女教令して使者及び從者の勞を謝し、孤貧の女鄙賤にして貴からず、遠く官屬侍從の枉屈を煩はし、王の重命を辱うす、女は寒賤誤つて宿福を以て王の階殿に當る。自ら顧るに陋醜にして女儀なく、容に桃花優曇の花なく、聲絃管耳に入るの聽なく、智に神聖大人の明無く、識に聖人萬里の見なく、身に紫金光潤の澤無く、氣に栴檀香麝の芳なく、言に忠和仁善の美なく、行に進退高下の節なく、謬つて王命を忝うす、徒に使者百官を勞し實に痛心に耐えず。諸の婦女に語るらく、汝曹薄福にして此卑役に墮し自今以後相共に從事して各正心修善王儀を犯すこ

とと莫らしめんと。諸の嫖女皆應諾す。又數多の青衣を呼んで曰く、人に貴賤なし、道在る者尊し、汝等皆善人の子、古今の變、卑微に處するを以て自ら卑屈すること勿れ、務めて善を爲すべし。皆曰く教を奉せんと。百官前進、王黃金白銀及び種々の饌物を以て禮す又衣百領夫人の服飾を進す。女便ち受けて衣裳嚴莊已に辨じ便ち出でて上位を拜す。百官之を見て歡喜せざるなく皆萬歳を稱す。國必ず太平ならん。我百姓萬民の母を得たりと、嫖女青衣親近して將くこと子の母を得たる如し。衣を攝めて車に乗れば車自ら端安に馬自ら調御す。天は清明に百鳥雲集して悲鳴す。百官臣民皆云く天人來床す國必ず安穩ならんと。王の門に到れば門自然に開け、宮に入れば宮中五色の光を放ち殿上晃々として内外照明なり。殿に入て王を拜せば王見て驚悚し知らず知らずに座より下つて之に答ふ。大夫人王に朝す。禮拜自ら跪き流水の如く王長跪して之に答ふ。宮内に敎令して柔和仁善にして他の意を傷めず。王之愛敬す、徐に言ひ語少く語る時は義に合ふ。内外敬伏す。宮に入て諸の嫖女と相娛樂

す。王意に之を見んと欲す。夫人意貞心潔、汚穢に在らず、本意清淨にして王と語らず、往いて相見えす。王の曰く、室家の義夫婦の分恩愛を以て親と爲す。夫人宮に入て七日、未だ相見ざる其意云何の法たりや。夫人嫁女を以て王に答へて曰く、妾が本生に二願あり。今已に一願を得たれども一願未だ遂げず。故に相見え申上げざるのみ。王曰く、已に得て未だ得ずとは何等ぞ。答へて曰く、我少小にして願を結ぶ。夫を國王と爲さん。二は神又は佛に事へん。王の曰く开は一度相見て後に當に佛を請すべしと。夫人云く否。未だ佛を見ること得ずんば終に王と相見ることとをせずと。王大に怒つて曰く、汝は本寒賤乞人の種、何ぞ敢て萬乗の意に違ふと。夫人曰く、婦人命を夫婿に繋ぐのみ。東にし西にするも唯命のまゝなり。然れども妾に宿誓あり。是負く可からず。王は尊しと雖も枉げて無辜の人を問ふを得ず。王の曰く、吾は萬乗の王、犯す者を即ち誅す。豈枉直を問はんや。夫人の曰く、王者は百姓の父母なり、斷截には當に道理を以てすべし。何ぞ理なきに自ら喜び自ら怒ることを得ん。凡夫す

ら行はざる處況や國王に於ておや。王の曰く、吾心に従ふ者は厚うし従はざる者は誅す。夫人曰く、大王よ女人亦微心あり、心に従ふことを得ば相見えんのみ。心に従はざれば終に相見えずと。王曰く、然らば云何が佛を請せんや。夫人曰く、佛我國に在ます。請じ上れば必ず來り玉ふ。王曰く、若し佛を請せば百官笑ふならん。夫人曰く、王佛を請じて宮に入れば百官自ら歡喜して世々福を受く、誰か王を笑はん。王曰く、大に善し、即ち厨に勅して數多の饌を作りて、具さに侍女を遣はして夫人に白して言さく、已に數多の饌を作り、汝具さに往きて佛を請すべし。夫人曰く、婦人は唯命從なれども請佛の義は大王自ら車騎を枉げ往いて佛に相見し深く恭敬して請じ玉へ。王曰く、我請するならば我自ら往かん、卿が請することなれば、卿自ら往くべしと。夫人曰く、王は尊貴是妾の夫なり。女人の力王者の微言に如かず、王威を枉げて佛に相見して請じ玉へよ。若し然らずば大王の家人に非ず夫婦の義なく他人なるのみ。王の曰く、夫婦の道成るも成らざるも卿が意に在るのみ。夫人默して言

はす。光耀として顔色凡に非ず。王夫人の恐くは自ら往かんと欲し又去りはせぬかと恐れ内外の司に勅して宮門を閉す。夫人は王の意佛を請せざるを知り、また夫人を信せざることを知り、夫人は殿上に於て形體が見えず、化滅しぬ。嫫女及び數多の夫人皆驚き相見て所在を求む。夫人の姿が見えすなりしかば、王大に慚怖して涙を銜んで起つ。王の曰く、奈何せん奈何せん我が剛直の致す所と、悔恨甚だし。何の方便を以てか還さしめん。第二の夫人王に白して言さく、大夫人は我凡庶の輩に非ず。王當に其意に稱隨し玉ひしに、忽ち拒み憤怒惡言を以て待遇し玉ふこと非なるに非ずや。王今大夫人を去らしめば妾等七十一人何れか恃怙せん、嫫女青衣啼哭すること喪の如し。天地闇陰として黒く、百鳥嘯鳴す。王天に向て太息す。第二夫人曰く、願くば王當に佛を請じて相見え玉へ。妾等俱に請せんが爲に詣で玉へと御勸め申上ぐれば、王は其言に隨ふ。王は其言を容れて忽ちに佛所に到り面頭に禮を作して佛に白して言さく、我は阿祇羅奈國の王阿迦達留なり、と三たび敬禮す。佛の曰く、國事勞擾、

又臣民平安なりや否や。王の曰く、皆佛恩を蒙りて平安なり、願くば世尊枉屈して暫く鄙廨に臨み玉へと。佛默然と受け玉ふ。佛は神通を以て忽ちに殿上に到り玉ふ、時に大夫人は諸の夫人及び姝女等と俱に佛の爲に禮し上る。王初め夫人を見得ず姝女も又見えす、唯佛のみ見上る。佛に禮し已つて心愁て歡ばす。佛王に語つて曰く、王の求むる所の夫人は正に此人是なりと。王見て歡喜し百官姝女大小歡喜せざるなし。王飯食を設け食已つて佛は咒願し玉ふ。各心中の所願をのぶ。王佛に白して言く、我夫人は本貧賤孤獨の母の女、今大夫人と爲る、何の因縁あつて尊貴の身百姓の母たることを得て仁賢慈悲美言柔和人の意を傷めず、形を隱すこと七日、之何の故ぞ、願くば説き玉へ。佛は王の爲に説法す。佛の言はく、大夫人昔大迦羅越と爲つて財富無數なれども慳貪にして施さず、故に今貧窮の身と爲りし。而して姪佚を樂みける爲に女人の身と爲れり。又好んで明達の道士と遊學せし故に智慧あり、已に五百の佛を見、今また佛に遇ふことを得たり。昔の世に王の爲に善智識と爲りし故に今夫婦と爲る。

とを得たり。乃至悉しく宿世の因縁を語り玉ふ。王は佛の教誡を蒙りて大歡喜して不退位を得。夫人及び大小公卿百官より舉國人民皆佛の教化を蒙りたり。佛の教化を蒙りて後、王は仁慈博愛正法を以て國を治め國豊かに民安し。眞に大平をいたせり。また塔寺を建立し僧に供し功德を積むこと限なし。

大夫人は深く人生の無常を思念し、晝夜唯姪供し恩愛無明に覆はれ、生を濁穢の中に葬らば死して不淨の鬼と爲らんと、長歎して衣服を易へ狀を敗り、王に白して言く世は悉く無常なり、皆死に歸すべし、王我を愛し玉ふ所以は我年少顔色肌膚などの爲ならん。是皆常住に非ず。皆死に歸すべし。再び得難き貴重なる年命を徒らに姪供猥穢の中に埋没して終身無明に酔ひて空しく過さば畢生の恨事なり。願くば大王我を聽して出家得道せしめ王へ。自ら努めて朝夕に經法を勤修し精進を加へて疾く佛道を成せば、還つて諸の一切の衆生を度せん、と願ひければ、之を聽き、大王及び諸の采女皆聲を擧げて哭きて言ふこと能はざりき。王は夫人に對する恩愛の情斷ち難く唯泣

きて止むるのみ。されども夫人の決心は固くして、王の意を解かんか爲に極力佛の法を勧め、此の身心は苦なり空なり無常なり無我なることを覺らしめ、また大菩提の中に無上の眞理萬德圓に備はりて缺くること無きを説きて勧めしかば、大王も漸く迷ひの醉夢より醒めて、實に眞門の歸すべき永遠の光明の前途に輝あるを覺りて遂に大夫人の志願を聽したれば、清淨の比丘尼と爲つて遂に大王を始め諸夫人深女及び人民に至るまでに教化を施しければ、王も國と位を太子に付して沙門と爲り、無上の道意を發して人民を度すこと無量なりと。

阿群の改悔

佛の在ます時に舍衛國に阿群と云ふ學生が在り。父に早く別れ、唯母と共に居りし。梵士の道を學ぶ。其性篤厚に言信實なり。勇力の逞しき、象をも倒す程なり。されば師も深く之を愛し朋友も厚く敬はざるなく、遠近咸に其の賢を稱す。師が若し外出

する毎に其留守をば阿群に委しぬ。師の妻は常に阿群に繫想しけるが師の不在を機とし阿群に姪辭を以て誘ふたけれども阿群は堅く辭して應せず、凡そ世の耆人男は父にて女は母である。豈に況んや師の妻に於ておや。縦令身を焼くとも道に背かじと言ひければ、師の妻は大に慚ち且つ怨み、退いて考へて、阿群を讒に陷すに如かじと、夫の歸るを待ちて即ち夫に告げて曰く、子は阿群を賢人なりと歎じなさるけれども子は彼を見る明が無いので、彼は子の不在を機とし妾に對して道ならぬ心を以て妾を汚さんとせり。幸に危きを免れたれども彼は實に信すべきものに非ずと婦は妖にして貞操を粧ひければ梵士は之を實なりと信じ、妖婦に欺かれたる師は阿群に告ぐ、汝は實に仙道を學ばんと欲するや、答へて實に然り、汝は道ならぬ心あり、汝が心は汚れたり、若し百人の血を流して其指を斬り取りて其罪を清めずは神仙の道を獲難しと。阿群は命を奉じて忽ちに全身の勇氣を鼓舞し宛がら摩利支天の如くに爲つて大劔を提げ市街に暴れ巡り、人に遇へば輒ち殺す。其勢の凄まじき、市人戰慄せざるなし。忽ち九十

九人の指を得たり。人民は恐れ慄き咸な逃げ隠れて市街更に人なし。唯見る者は母あるのみ、欣然として母を殺して數を満して仙道を得んと欲す。佛は遙かに之を知り玉ひ、邪道の衆を惑はし普天の道を惑れみ、化して沙門と爲りて忽然として其前に現はれ歩みつゝ曰く、已に人數は足れり哉と、阿群は之を見て後を追へども屬かず。曰く、沙門止まれよ。答て曰く、吾は止まれり。爾自から止まらざるのみ。時に阿群は心開けて喩へば黒雲除きて晴れるが如くに五體を地に投じて頓首し過を悔ひて叉手す。是に於て、世尊は後に隨はして精舎に還つて即ち沙門と爲す。佛爲に宿行を説き罪常を説き玉へば法眼淨を得たり、國王阿群を討たんと欲して兵を出して進み行きけるに已に發心して沙門と爲ることを聞て深く歎じて一に之を見んと欲す。佛阿群に言さく、上德賢者よ、汝尙一眼を開くべし、と相観ること斯の如くして三たびに至る。答へて曰く、我眼睛は耀にて射るとも當り難し。王阿群に稽首して曰く、明日微饌を設けて供し上らん、願くば一たび顧眄し玉へと請じければ、答へて、我は本汚れし者

若し廁に於てせば吾は往かん。殿にては我は行くに應せず。王の曰く唯望みの如くに
せんと、還つて廁を裂き其地を掘つて新なる棒梓を以て柱梁と爲し香湯を地に沃ぎて
諸の香を合して泥と爲し種々の座席と有ゆる衆寶とを以て廁を嚴飾し、其美麗殿堂
よりは踰えたり。其日王は自ら香爐を捧げて迎へなされた。阿群が座に就けば王は衣
を褰げて膝行して供養しぬ。即ち説いて曰く、廁の前日の如く汚れたれば豈飯を上る
ことを得べきや。答へて曰く不可なり。今の如く嚴飾せば如何。答らく可なり。阿群
曰く、吾未だ佛を觀ざる時の心の汚は彼の廁よりも甚だしかりき、幸ひに宿福ありて
佛世に生れ値ひ、心が沐浴淨化して臭を去り香を懷きて内外清淨なること天の眞珠の
如くなるを得たり。但是佛恩の然らしむる處實に然りと。飲食し已て王宮を退きぬ。
市を過ぎんとするに聞くに婦人が難産にて逆生の者あり一命呼吸にあり、之を聞きて
還つて佛世尊に啓し上ぐれば佛阿群に言はく、爾が往きて其が爲に産ましめよ。阿群
命を受けて往いて祝願す。佛恩によりて母子俱に生くべしと念じければ、便ち生る。

佛阿群に告げ玉はく、汝が受道の日は始めて生れたので、未だ佛を見ず戒法を受けざる昔は兒の胎に處するが如し、難産にて危きこと一命呼吸の間にあり、耳目ありても何をも見聞が出来ぬ。未だ生れざる時の如しと、阿群が心開けて應真道を得たのは兒の生れたやうなものである、汝が應真に生れたのは世の衆多の人の幸福であると。

沙 彌 僧 大

舍衛國に厲と云ふ家あり。大に富めり、己に年老て繼嗣なきを憂ひて日月天神に禱れども更に驗なし。自ら念ふに、斯く神に祈願するも効なく、寶財消散し産業は修まらず、疾病相續き種々の不祥のみ重なり來るを嘆き、是全く殺生して神明を祀るは甚罪重し、今より悔ひ改めて佛法に歸せん。佛法は高尚なる聖學、斯道を奉し唯清白無欲なれば眞の樂あり。現在に心安穩にして終には天上に生ずべしと。一に三寶に歸して一載餘にして婦に男子を生む。佛大と名づく。後にまた男子を生んで僧大と云ふ。

僧大は稟性慈孝にして萬物を慈しみ、佛法を信奉し沙門に親近し清淨にして知足なれば二親は殊に之を愛せり。屬が病に臥し床に着き、長子を呼んで遺訓に曰く、汝能く佛の教誡を守らば必ず安穩なり。僧大は尙幼少なれども仁孝なれば方に汝に囑むに依つて能く慈しみて呉れよと。言ひ畢りて冥目しぬ。僧大は其後兄に願ふて沙門に作らんと希望しける。其國法として婦を得んと欲せば具さに沙門に作らんと願ふ時は得ると云ふ風習なれば佛大は弟の爲に妻を娉せんとて賢家の女を索む。快見と字け、華色美麗端正無比なりき。婦は歸きて堂に昇る。兄は賓客を招きて祝儀を設け、衆の前に於て弟に謂つて曰く、汝は望の如くに今日沙門と作るや。僧大答へて曰く、我本宿願なれば願くば遂げさせて玉へよと。弟は兄の許を辭し、歡喜して禮を作して山に入るに、一の壯年の沙門あり。其形貌端正にして獨り樹下に處するを見て、問うて云く、賢者は何に縁つて沙門と成り玉ふぞ。其沙門は已に應眞の道を得しかば豫じめ宿命を知り僧大に謂つて曰く、佛説き玉ふ。人姪佚を好めば炬火を執つて風に逆て行くに

等し。其炎捨てずんば還つて手を焼くが如し。我は斯の過を見て沙門と爲れり、と。
また詳かに其過失を説く。僧大之を聞いて深く感銘して稽首して曰く、願くば我も世
の濁を去りて自ら清淨の道を履み、高く菩提の道に階らんと欲す。沙門曰く、汝山に
入りて道を修めんと欲せば能く時節を知れ、而して水と火と妙密とを貯置せよ。然る
所以は盜賊來りて水火妙密を求むるに若し之を給與せざれば賊必らず害を加ふ。僧大
教を承けて拜謝して山に入る。家に於ては兄の佛大謂へらく、弟の僧大は已に僧と爲
りて妻を蓄へず。快見は無比の美人なれば心竊かに悦び快見の心を奪つて己に順は
しめんとの野心が勃々と發つて其情を誘ふ爲に琴を弾じて姪佚の曲を歌ふ、曰く、煌
々たる鬱金は野田に生ず、時過ぎて採ざれば宛然棄てらる。蔓爾たる豐熾華色惟れ新
なり、馥郁として芳を放つ。我と同じく歡ばんと、快見は己を誘惑することを覺りて
歌うて答ふ。巍かき我師は天人の尊、門徒は清淨論て沙門と曰ふ。眞を觀つて聖と
爲り、姪するを畜倫とす。我は嚴戒を受けて二君に事へず、終に姪を生ぜず、寧ろ寸

分に就つくと。佛大亦情悲の曲と萎靡の辭を作り、宿心爾を嘉す、故に良媒に因る、名
 を問ひ師に詣つて相良時を占ふ。慘々惕々として爾が來らざるを懼る、既に爾が顔を
 観て我心怡々たり、今歡を合せずして豈に徒らに費さんや、斯誓是定まれり、淑女何
 ぞ疑はん、快見兄の心を惶惶わうけんして歌を以て答ふ。佛は禮儀を設けて尊卑序あり、叔
 妻は即ち母、壻伯は即ち父、我親しく戒を奉け、日に隆舉あり、眞は聖と齊しく、姪
 すれば正に蟲鼠、噫乎伯子焉ぞ斯語を爲すや、之を聞きて兄の心は益々貪迷て彌々強
 て逼らんとすれば、快見は嫌忌と懼れとが益々強まり、歌つて曰く、夫れ人の世に處
 す、當さに二事を遠ざけん、不孝と姪亂とは行ひ佛戒に違ひ、天及び賢者其の自異を
 箋すと。佛大は執拗に快見を愛著して捨つること出来ぬ。亦歌ふて曰く、爾が容色蓮
 花の如し、普天の美女豈に爾が顔有らんや、我心相悦ぶ、故に大山に超えたりと。
 此を聞きて快見は何とも恐怖に耐えぬ。此人我を執して悖狂の亂を爲す。如何なる大
 難の身に來るやを憂ひ、請ふ己が身中の惡露不淨を説いて厭忌の心を生ぜしめんには

如かしとて、重ねて曰く、仁我體を貪り玉ふ。此體何の好か有らん、頭に九骨あり、合して髑髏と爲る、乃至具に體の不淨を説いて兄の心を解かんとす。快見は肉欲を以て己を愛して逼り来る兄に對しては厭忌と怖懼とに壓せらるゝ感あり。而してまた己を顧る暇なく深く佛の道に志して志節雪より潔き僧大が山に入りて修學してゐる。それを戀して忘るゝこと出来ぬ。佛大自ら念ふ。彼女は其夫を念ふが故に我に隨はぬ。寧ろ弟を殺して仕舞へば我に隨ふこと疑ひなしと。行きて數多の賊の中に募り求めて、賊に語りて曰く、汝知るや我家に畜へてゐる六籍の奴子あり、今は逃れて山中に在るを。賊の曰く、我之を識れりと。佛大曰く金銀を出して之を與ふるに依て汝彼の奴子を殺せよと。而して其頭と及び身上の衣と所持の衣服と足下の履とを皆持ちて還れよ。然らば復重ねて金銀を與へんと。本より殘忍なる賊共、大に悦びて然らば其命に隨ふ故に復必ず金銀を賜へよとて去りて忽ちに山に入りける。彼の殘忍なる賊僧大の所に到り呼んで曰く、沙門よ汝疾く出て來れよと、其弟出で、曰く、諸

君何をか求む、吾に水火鈔密あり、之を食ひ玉へ、時已に夜半を過ぎぬと。其賊曰く我等水火杯を求むるに非ず。汝が頭を持ち去らんと欲するのみと。弟之を聞いて大に怖れて泣いて曰く、吾は長者諸侯の子に非ず、俗を棄て道に入つて世と争ふこと無し。道を學び日淺くして未だ眞の道を得じ、吾を殺して何の益か有らん。賊の曰く、我等來ることは唯汝が頭の爲である。弟また賊に語つて曰く、寶を得んと欲せば吾兄の許に書を以て卿等に寶を惠まんと。賊の曰く、汝何を云ふ、子が兄よりも我等を使つて子を殺して其首を持て來よとの命であると。之を聞いて弟は粗兄の心意の有る所を覺りて曰く、吾今死することは斯婦の爲である、されば我が師が前に我を戒めて、人姪の爲に炬火風に逆うて手火に焼かるとの訓誡を思ひ出し、涕泣して賊に向つて一歳の命を延されんことを乞ふ。賊の曰く、急に頭を取り來れとの約束なれば夫はならぬ。僧大曰く、然らば願ふ處即ち我頭を斷つこと勿れ、初めに先づ我一髀を斷ちて我前に置き玉へ。賊即ち一髀を斷ちて其前に置く。弟此痛に遭ひ、天其側に來て曰く、慎

で恐怖すること勿れ、牢く汝が心を持せよ。汝前世の時畜生の中に生れ屠割して其肉を賣られたること幾度ぞ。また地獄餓鬼の身を受けて苦痛せること曠劫已來窮りなかりし。僧大天に白さく、請ふ、我師に報じ玉へと。天即ち通力を以て其師に語つて曰く、賊今其弟子を殺さんと欲す。悲泣して哀れみ、師に相見んと欲すと。之を聞て師は通力を以て飛往いて法を説て曰く、天地須彌も尙滅し海も消渴ことあり、七日にして破壊す、ヒバラン風は山河大地を搏ち消す力あれどもまた滅することあり、況や汝が小軀をや。但當に一心に念佛すべし。佛常に言く、生者一必滅、會者定離、榮華保ち難し、身亦是の如し。此限りある身を捨て佛の永恒の光明を求むべしとの教に僧大は佛の光明を専念して預流道を得たり。復一髀を斷せられて一心に念佛して一來道を得、又左の手を斷たれ一心念佛して不還道を得また右の手を斷るるに一心に念佛して應眞道を得たり。已にここに至れば生死自在にして復畏るる所なし。僧大曰く、願くば我が爲に樹の皮を取つて來り給へ、賊は樹の皮を剥いで與ふ。僧大は枝

を取つて筆と爲し身の血を刺して樹皮に書いて曰く、吾大兄よ、時に隨ひ起居安全なりや、二親在ます時吾は兄を累はすを以て兄之を承けす。親の教に違き女色を以ての故に骨肉相殘ふ。親慈の教に遠くは是不孝なり。人の命を殺す是不仁なり。一の畜生を殺すすら罪少からず。況や應眞に於てをや。吾は已に眞の道を得たれば善く寂靜に遊ばん。此よりは長く別る。努力して願くば眞の道を崇び玉はんことをと。書きて此を兄に授け玉へと、頭を伸して賊に語て曰く、子吾が頭を斷つ猶泥頭を截るが如し、吾は已に眞の道を得たれば遺憾なし。唯汝等が地獄に墮せんことを恐る。願くば心を改めて善に還れよ。言ひ已れば賊は前みて頭を斷ち身の衣杖履及び鉢を取り持ち去りぬ。賊は其の首等を持ちて兄の所に往いて之を與ふ。兄は悦び金銀を以て重く賊に謝す。兄は弟の頭を以て假身を作り頭を上に着け衣を着せ杖鉢及び履を其傍に置きて快見を呼んで、汝が慕ふ所の良人歸り來れり、之に問訊せられよと。快見は一たび袖を分ちてより已來、片時も忘るる事なき僧大の歸り來ると聞て大に喜び蹀つて走り薄

聞き一室に到り其目の閉づるを見て冥想觀念せるものと思ひて敢て呼ばずして去り、
具さに美饌を作り、念道の覺めたるを須ち、當に之に供せんとす、日中すれども覺め
ざりしかば、妻前んで曰く、日今は已に中ず、時過るを恐る、請ふ食し玉へと。其應
せざるを恠しみ衣を牽けば頭脱げて身は分散す。妻は悶絶し叫んで曰く、子我に坐つ
て殘賊せらるゝと哀憤天に呼び肝心崩裂血口より出で奄然として逝きぬ。アア哀しむべ
し、快見戒行清白にして汚れざること淤泥の蓮の如し、心を聖範に樹て動き難きこ
と地の如し、眞淨行高きこと天の如し、其未だ終らざるに諸天咨嗟し其靈魂を迎へ
て清き天上界の人と爲して天上にて難盡の樂を得る身とはなりぬ。兄はもはや快見が
僧大のこの狀を見れば斷念して心を轉じて我に依る外なしとて、室に入つて視れば弟
の頭と身と分散しておるのみならず、己が戀念して止まぬ快見は血を吐いて亡して
る。其狀態を見ては如何に我儘勝手兄とても耐えられぬ。即ち曰く、咄々吾れ天に
逆へる所作酷烈の爲に此に到る。天地の間に身の置き處なしと即ち賊の所に至りて弟

の臨終の狀態を聞きたくなつた。弟が没するに臨み、如何に言ひしや、賊は遺言を以て兄に授く。兄は悽惻して書を讀み已つて五内咽び塞がり涕泣交々胸裂けんばかり我尊親に違き慈教を亡じ骨肉相殘ふ。又彼は我弟と雖も已に應真道を得たり、之を殺せり、ア、我は地獄の業已に熟せり、天に訴へ地に認るに處なし、弟の僧大は道の爲に身を殺されたるも已に應真を得たりき、これ道に於て遺憾なし、實に其志操の高き、讃歎すべしとて、國王及び臣民涕泣して其情徳を歎述して遺骸を殯葬し塔を建て其徳を頌すと。

僧大は道に入て日未だ淺しと雖も其志深きが故に迅く應真を得たり、彼は短時間を経て道を得んと欲し一瞬と手と斷つ毎に一心念佛して道を得たりと。我等は日々時々刻々毎に己が年命の割截せられつゝあることを覺らず、幾年空しく精力を費し、幾時徒らに生命を促めぬ。アア我ミオヤよ、我等又佛大の如くに親の慈教に違ひ己が肉欲

を貧る爲に貴き光陰を空しく費す。往昔の佛大今現に我身である。

老僧アバータの發心

天護と云ふ豪商あり。陸求那國に往きて慈善を樂みとし深く佛を信じたりき。先に海に入りて若し安穩に還らば、佛法中に五年の大會を開きて土地の人民に法を聞かせんと志を陳ぶ。其事が國內に聞え渡れり。時に羅漢の比丘尼ありて其附近に住しける。瞑想に入つて、天護は安穩に還つて大會を作り得らるることを知りて、また一萬の比丘を請じて皆羅漢にて、また學人も數人あり凡夫僧も又數多である。其上座の比丘婆婆陀を見れば凡夫である。尼はアバータの覺醒を催がす爲め、僧房に入り、次第に禮を作して上座に謂つて曰く、大德よ、今大德を見るに甚だ端嚴ならずと。上座自らおもふに何故に我を不端嚴と云ふにや、鬚毛の長くのびてをるその爲ならんと。年少の沙彌を喚んで髪を剃らしめた。尼は復不端嚴と云ふ。上座また衣服を着替へても尼

復た不端嚴と云ふ。上座瞋りて曰く、我已に鬚髮を剃り衣を洗滌し竟る、何故に不端嚴と云ふや。答へて、今日佛法には肉眼にて視ゆる形や衣服を以て端嚴と云はず、應眞の道を得れば眞に端嚴と爲るなり。大徳聞き玉ふや、天護商主が諸の大徳を請じて五年大會を作すことを。答へて曰く已に聞けり。曰く、大徳は凡夫にして第一の上座と爲り已に道を得たる羅漢衆の中にて先づ供養を受けなば是莊嚴なり哉不や。大徳之を聞いて啼泣懊惱す。尼言く、大徳何故に啼泣し玉ふぞ。答へて曰く、姉よ、羅漢道を得たくも我今已に老いて修行に堪えぬが故にと。尼曰く、如來の正法、時節また老少なし。大徳よ那哆婆哆寺に往いて優婆笈多尊者に就いて修道し玉へ。此尊者は佛の記し玉ふ第一の教師なりと教へけり。そこで長老比丘は直ちに優婆笈多の許に詣でければ、尊者出迎て語つて言く、大徳よ、洗足消息するや。答へて曰く、我未だ洗足せずと。優婆笈多を見んと欲すと。弟子の曰く、大徳よ、是即ち優婆笈多にて來り迎ふなり。大徳歡喜して便ち自ら洗足し、優婆笈多之を教化し玉ふ。施主よりの洗浴飲食

の供養を受く。尊者維那に告げて曰く、今二の解脱を得。比丘坐禪處に入れば數多の羅漢も悉く禪處に入る。此時に比丘が第一禪座の處に入つて座する時に、尊者が火光三昧に入ると、數多の羅漢も火光三昧に入る。時に比丘之を見て心歡喜を生ず。尊者は比丘を教化し玉へば比丘精進して應眞道を得て本國に還りぬ。羅漢の比丘尼は僧伽藍に往きて禮拜して白さく、今日大德實に莊嚴已に成れりと。大德悦んで曰く、是全く貴尼の力なり。若し貴尼の獎に依らざれば自ら自己は羅漢果を得るの分に非ず、自暴自棄して終るべきを此に至りしは全く貴尼の力に依れりと深く感謝せり。其後五年の大會に天護上座に問うて言く、世尊種々の說法と上座の所説と異なることなし。上座答へて曰く、過去九十一劫に我等商主と爲りて海に入て寶を採る。誓つて船に満て還る時に大風に遇ひ船が沙海に墮ち、我等毘婆尸佛の爲に沙を聚めて塔を爲り種々の供養を獻す。時に諸天我に道路を示す。七日の後に大水來つて船が本州に入るべしと。果して七日にして本國に入ることを得、已後九十一劫惡道に墮せず。今阿羅漢果を得

たり。汝今能く供養す、汝宜しく出家すべしと。天護旨を承けて、沙門と爲り羅漢果を得たりと。

ミオヤの光は滿天滿地照さざる處なし。何人も己が現在の我は罪垢深重にしてミオヤの光に接せざれば靈に活きること出来ぬを信じ、唯己が無知罪惡なるを信じ、ミオヤの心光を仰ぎ、一心不亂なれば、必ず光明に觸れて、清き人と生れ更らん。今の老比丘の如き若し悟道の尼に値はざりせば羅漢は己が分にあらすと自ら棄て已らん。

讀者よ、今現に此處にミオヤ在ますに非ずや。老比丘は數多の羅漢衆の火光三昧に入る相を見て自分も一心に摧勵して道果を得たり。

諸子能く念佛して光明を獲得し玉へ。

兄弟射を爭ふを解く

佛竹林に在す時、豪家の子に兄弟あり。父母俱に早く死しければ共に居て遺産の財を争て中々解けぬ。此に於て兄弟は舍利弗尊者を見て歡んで兄弟等の意が和解出来るやうに願ひければ、舍利弗の曰く、善哉、吾が大師、三界の尊、爾等我に隨つて來れ。佛の所に到らば必ず和解できるとの示しに、舍利弗に隨つて佛の所に詣る。佛は四人を見て笑はせ玉へば、口より五色の光を放つ。四人佛に禮して白さく、吾等兄弟愚昧にして共に財を争うて意解せず。願くば哀を垂れ我等が意を解きて復た争はざらしめ玉へ、と請じければ、佛の言はく、昔國王あり、惟妻と云ふ。身體に疾あり、醫を迎へて診察さすれば、若し獅子の乳汁を用ゆれば癒ゆべしと。王は之を四方に募り之に應ずる者には土を分けて封じ、並びに小女を妻にさすべしと。時に貧人あり、啓して言く、能く應じ上らん。王之を聽き玉ふ。其人巧慧あり、先づ羊を殺し、葡萄酒數斛と持つて山に到りて獅子の出入所に置く。獅子之を飲食して大に酔ひて熟睡す。前んで捉えて乳汁を取つて歡こんで還る。未だ本國に達せざる途に暮れて聚落到宿す。

此人獅子を追ひ險道を跋涉し、體極めて疲れ熟睡して知覺なし。同宿せし一羅漢ありて此人の身中を觀すると六識各自功を爭ひて止まず。足神の言く、獅子の乳汁を得たる功は我にあり、我險道を行くに因て之を得たりと。次に手神の言く、手が捉取すればこそ乳汁を得たり故に功は我にあると。次の目神言く、汝等が言ふこと然らず、我れ見る故に之を得たりと。耳神の曰く、我王の命を聞きて爾等來れと云ふ故に之を得たりと。舌神言く、汝等空しく競争す、此功は我に有るなり、今活殺我に有るのみと。斯人王の所に詣つて白して言さく、今已に獅子の乳を得て外に在り。王言く、但疾く進めよと。王適々乳を見ると舌神即ち言く、是實は獅子の乳に非ず、但驢馬の乳汁のみと。王聞いて大に怒り言く、我汝等に命じて獅子の乳を取らしむるに驢の乳を以て王を欺く、其罪多し、殺さんと欲すと。時に共宿の道人即ち神足を以て王の所に到つて前みて報じて曰く、此れ信に獅子の乳なり、我時に此の人と共に聚落に宿す、其身中にある六識共に其功を爭ひ勤めたるに、舌が我に活殺自在の權を有すとて詐つ

て斯の如くに奏したのであると。王乳を以て藥に合して之を服せしに其病癒ゆ。王道人の言を信じて之を用ゐて女を以て之に妻す。並びに封拜すること本の約の如くす。道人王に告げて白さく、一人の體識すら各自相互に反戾す、況んや他人に於ておや。時に乳を取る者道人の恩を知り、沙門と作りて道果を得たりと。王も歡喜して受戒して法眼を開けりとの喩を以て諭しければ、四人意解けて便ち佛に隨ひて度を求め終に剃度して道を聞き、煩惱解け、塵垢除きぬ。阿難佛に白さく、此四人何の功德有てか。今教を聞き意解して疾く道果を得たりしや。佛の言はく、昔摩又佛の時に舍利弗比丘たり。此四人賈客共に一の袈裟を以て舍利弗に上りければ、舍利弗君等が後世早く度を得せしめんと呪願せし因縁によりて今舍利弗に従て解脱す。

阿難山向比丘を試む

阿難尊者が兩りの僧と共に阿育王國に到る。山向比丘と云ふあり。松の上香花自か

に至り鈴鳴つて語ふ如し。山向比丘は何故に鳴るやを知らず。四面に出でて禮を作し
 て齋堂の中に還つて經を誦しぬ。阿難が兩僧と共に乞食と爲つて復數多の乞食を將れ
 て往きぬ。山向比丘は食を作りて快く與ふ。また衣を求めばまた有るかぎり悉く與
 ふ。數多の乞食復た去らず、日々朝夕悦びて供養しけり。程經て乞食共が悉く病氣
 に成ると、比丘朝夕燒香して一心に其平癒を祈願し又藥を與ふ。乞食皆死す。比丘沐
 浴して棺に殮む。阿育國王に請ふて人を以て葬らしむ。後數日ありて阿難兩僧と三人
 の書生と化して清潔なる衣服にて往きて松下に到る。比丘講堂を下つて之を迎へ座に
 就かしむ。三書生比丘に謂つて言く、汝佛に事へて何をか求む。比丘言く、佛道は神
 道なり。天地の間唯佛道のみ神我なり。佛に事ふる所以は佛道を得てすべてを度せん
 と欲するのみ、他に求むることなし。三書生曰く、佛道は不神なり、但空虛、智者は
 事ふる者無し。汝何ぞ愚昧にして佛などに事ふるぞ。比丘言く、君の言ふところ非法
 なり。佛道は最神なり。人の所見に非ず。神變無方人の所知に非ず。諸君よ百姓は無

智である、自ら知らず、君の如きの言を作すは衆を惑はし諸君の罪を益すと。三書生大に怒る。汝は佛に事へ人意に逆はすば汝は我等を追つて奴僕と作すか。比丘曰く諾、書生云く、汝善奴ならず、汝に尿を擔はしめん。汝百石の糞を得べきや。若し之を得ずんば汝が頭を斷つべしと。比丘即ち行いて尿を擔ふに多く得ること能はず、還つて書生に謝す。我力では多く得ること出來ず、乞ふ我罪負を原し玉へ。書生大に怒つて之を縛つて痛く鞭つこと三百、忽然として去ると。阿難は便ち優婆塞と化して比丘に三書生の無道を語つて我汝を助くる故に當に其無道を王に訴へざるやと。比丘言く、否此全く自分の過の故に此を致すのみ。佛に事ふる者何も愛惜する所なし。頭を求むれば頭を與へ體を求むれば體を與ふ。我但尿を擔て鞭うたるる位何の苦かあらんと。後阿難と兩僧と阿育國王と作つて比丘に告げて言く、佛に事ふること、定て益なし、空しく人生を勤苦す。人の世間に處する須臾にして死すべし、何ぞ獨り勤苦して是の教を奉ずるや。我今相與に事を議らんと欲す、我に従へば佳し。我に従はずば汝

を殺す。比丘言く、大王よ何事をか議し玉ふ。王言く、我に貴女あり、才操世に絶す、
 容貌好美にして手蜂の子の如し、我は道人が人と爲り温良なるを好みし、以て相與に
 爲さんと欲す、故に來て意を報ず。依て相從ふべし。比丘曰く、王の厚意を知れり、
 我佛法を奉じて已に年歳を積めども功德未だ成らず。反つて王女を貪りて佛道を辱し
 めば是罪少からず。君殺すならば悦びて之を受け上らん。王使ち王命に背くとて怒り
 て丘比を將ゐて市に詣つて之を斬らんとす。比丘即ち佛を禮して去り又王の爲に謝し
 て禮して頭を擧げて見れば阿難前にあり。比丘即ち禮を作して頭面を地に著くれば、
 尊者は起つて之を持し之をして復坐せしめ、悉く自ら識る。尊者は比丘に謂つて曰く、
 汝が功德已に成じ汝當に道を得べし。我故らに汝を試みて其意志を視るのみの。比丘地
 を下りて言ふ、我無智にして佛恩を受けて法中に在ることを得、善を作すこと能はず。
 煩はしく神人を苦しめ來つて相憂念せしむ、恩德報じ難しと。阿難道を以て比丘に授
 け俱に樓上に上り經を誦し義を説いて歡喜せしむ。阿育王と阿難と廣く經理を談する

こと數番、阿難言ふ、王は本是れ提和竭佛の弟子にして提頭羅と云ふ。山向比丘は釋迦文佛の弟子須拔と云ふ。佛滅後我人孤窮にして法を持すこと固からず罪過を致して年數を歴れども相識らず、我者山向比丘と俱に小家に生ず、我は兄たり山向は弟たり、常に自ら相憐れみ出入相追つて神より相識らず、我後に國王と爲り、山向の來生我亦識らず、天下反覆して轉相寄生すること數ふべからず。今は自ら知り生死を脱することを得て阿育王に羅漢道を授く。

羅云の出家

若し一たびミオヤの光明を被りて人生の眞志ここに在ることを自覺する時は、世の無明に目盲ひて人生を空しく徒費する者を見て焉んぞ之を措くに忍びん。我等が凡夫已に爾り、況や大聖世尊自ら正覺の光明を發見し一切を一慈光明の下に攝せんとの願望あり。いかで因緣深き羅喉を唯恩愛の泥淤中に措くを忍びん。

佛は目連を召んで仰せらるるに、目連よ汝カピラ城に往いて我父及び叔姨母とまたラゴラの母を慰諭して恩愛のきづなを断つてラゴラを放ち、沙彌と爲さしめよ。母と子との恩愛につながれて共に地獄に墮せば實に傷むべし。ラゴラが道を得ればまた母をも度せん。永く生死を越えて我今の如くにせばやと。仰を蒙りて目連カピラ城に至りて具さに佛の聖旨を陳べ傳へんとしけるに、ヤンダラは佛の遣使と聞いてラゴラを懷きて高樓に登らんとす。監官に勅して門閤を閉して人を通さしめず。通力自在なる目連は飛び上つてヤンダラの前に在り。已むを得ず禮を作して問て曰く、世尊は恙なく在ますや。上人を遣はし玉ふこと何の爲にゐますや。目連言く、太子ラゴラ年已に九歳なれば出家し聖道を修學せばやとの聖旨を具さに陳べければ、ヤンダラは世尊は太子たる時に妾を娶り、妾は天神に奉事する如くなる未だ三年満たざるに妾を捨て

宮城を出て山に入り自ら約して道を得れば當に歸り玉んと、然るに得道し玉ひてより國に還らず親を顧みず、舊恩を忘るゝ路人より劇しく、妾をして孤獨を守らしむ。妾は太子に別れてより今日まで日として世に活ける心地とては無かりき。尙此子をまて乞士の眷屬に爲さんとは何ぞ酷なる。如し太子成道して自ら慈悲を以て世を救ふとならば、今母と子とを離す如き是の如き殘酷世に無からん。願くば上人よ、還つて妾が所陳を世尊に傳へ玉へと。目連は辭して淨飯王の所にて具さに上の事を宣ふ。王此事を聞き玉ひ、即ち夫人のハジヤハダイに告げて、我太子悉達今は道を成じて衆生を度し、ラゴを迎へて聖法を修めさせんとのこと。ヤソタラは女人愚痴執着して縦すこと出來ぬと。汝往きて能く諫めて其心を曉らしめよとの仰せ蒙りて、夫人のヤソタラに對して再三すれどもヤソタラ唯哭泣してラゴを聽することが出來ずして云ふ、妾が昔家に在る時、八國の諸王競ひ來て求められたるに、父母は許さで太子の才藝人に過るを以て父母之に與へられた。太子世に住さぬとならば何ぞ懇ろに妾を娉せられしや。

人の婦を取るは正に恩好の爲め子孫相續する爲め、是れ世の正禮なり。然るに太子既に去り、剩へラゴを索めて永く嗣繼を絶つ如き何の義か有る哉と。夫人はヤソタラの語を聞て黙々として言ふことなし。佛化人を遣はして空中で告て曰く、汝往古を憶へ、誓つて我に違はじと、菩薩五百の銀を以て汝に順ふて五莖の華を買ひ定光佛に上る。汝我に二華を寄せて世々生々常に君の婦と爲らん、我汝に語つて曰く、我菩提の爲に一切布施す。汝即ち誓を立て世々に生るゝ所、國城妻子乃至自身、君に隨つて施與すと何故に今日ラゴを愛惜するや。ヤソダラ廓然として悟りて子を愛するの情かはりて此子をして道を悟らしたく思ひ、目連尊者を喚びて前の非を懺悔し、ラゴの手を捉り、懇ろに付囑し、涙を流して別る。ラゴ母に啓して曰く、母よ、世尊にまみえ玉へ、愁へ玉ふ勿れ、と尋て退いて淨飯王に見ゆ。王諸の豪族に告げて卿等各一子を遣はして我孫に従隨せしめよと。即ち五十人佛の所に到りて頭面に作禮す、佛阿難を以て五十の公子悉く出家せしむと。

宇宙は吾人の心を刺戟し深く究め精く訪はざれば已まざらしむ。宇宙は疑問に充ち神秘の事に充ちたり。之を釋き之を明にせんには智力を集め心思を凝らして之に當らざるべからず。自然界の最も單純なる事實、社會の簡單なる事實と雖も、少し精密に究むれば種々の難多なる要素極めて微妙に組立つ。吾人之を理解せんには仔細に分解し成分を知り原理を明かにし各部相互の關係を詳かにせざる可からず。吾人の思想内に入り來る事物は一事一物多くの神秘を含み居り、他の多くの事實事物と相關して存す。宇宙は雜然たる集合體にあらず、渾然たる一個の活物、調和を具へまた統一を具ふ。宇宙間一物の孤立せるものなし。萬物相互に相依存す。各個は全體の爲に存す。斯の如き宇宙、吾人は事物の皮相に止まらずして、神髓を究め、個々の事實に就ても、原因を究め、結果を究め、理由を究め、目的を原ね、相互の關係を明かにし、其同じきと異なる所以の理を知り、調和と平衡の真相を視て、其等を支配する大法則を詳にせざるべからず。